※二〇一二年八月に新日本文芸協会ＳＮＢ４９プロジェクト代表の橋本留美が、由井寅子先生に今最もお聞きしたいことをインタビューしました。この内容はそのインタビューに加筆・修正を加えたものです。

ホメオパシーとの出合い

―（橋本）由井先生、本日はよろしくお願いいたします。私は幸塾の活動などに参加して、世の中にあまり出ないけれど、人々の役に立つような情報をいろいろと知りました。そして今、それを広めたいと思って新日本文芸協会で本を出版しております。

（由井寅子先生）それはすばらしいですね。今回はホメオパシーを取り上げていただき誠にありがとうございます。ホメオパシーは、今、世の中に出たくてもなかなか出られませんからね。新聞、ラジオなどでは、「ホメオパシー」そのものが放送禁止用語になっているようですから（笑）。

大下伸悦先生のおかげでこういう機会をいただいて、「私たちが本当に何を言いたいのか」というのを紹介していただけるのはとてもありがたいです。感謝しております。

―こちらこそありがとうございます。私は由井先生の本も読ませていただいて、先生のことを

とても尊敬しております。

ありがとうございます。私の言っていることは、とくに過激ではなくて、本当のことを言っているつもりなのですが、あまりにも本当すぎて過激に聞こえてしまうそうです。けれど、世の中の真実を知りたいと思う方には、やはり私の本を読んでいただければと思うのです。そしてよく考えてほしいと思います。

たとえば、「子どもたちが病気にかからないよう予防接種することは、果たして良いことか？」、「農作物に人工肥料（窒素、リン酸、カリウム化合物）をやることは良いことか？」、「Ｆ１の種（雑種交配によって一代限りしか育たない種）や、遺伝子組み換えの種を使うことは果たして良いのか？」、「田畑に、農薬・殺虫剤をまくことが果たして良いのか？　環境的な影響はどうなんだろうか？」といったことですね。

私も、そういうことを考えるようになったら、自分が見た事実と世の中で一般的に言われていることがあまりにもかけ離れていることに気づいたんですよ。「これは何だろう？」と思いましてね。「私が見ている事実というのを、みんなは見ていないんだろうか？」と考えさせられました。

ただ私たちホメオパスは、実際に患者さんをみますので、どうしても患者さんを通して事実を突きつけられます。たとえば、予防接種のワクチンを天文学的に物質がなくなるまで薄め（希

釈）、たたいた（振盪した）レメディーを与えると自閉症のお子さんが感情を出して、喋るようになったりします。そうやって何人もの自閉症のお子さんたちが、ワクチンのレメディーで良くなっていくのを見てしまうと、真実だとしか思えないわけです。それは物議をかもすかもしれないけれど、やはり子どもを育てるお母さんがたにはとくにわかってほしいと思うのです。予防接種は子どもの病気を予防していない、それどころか多くの病気を作っているということを知ってほしいのです。

それから農薬を使っていない農作物を食べてもらいたいんです。そのために私自身も農民になって農作物を作ったり、といった活動をしています。

―幸塾の活動でも、本物の情報を広げようということで、さまざまな講師の方をお招きしているんですが、やはり一般常識とはかけ離れていて、なかなか理解されないことも多いですね。

そうでしょうね。でも皆さん、それぞれご自身でもいろいろな体験をされていると思います。その体験や経験が真実でないというのはおかしいと思うんです。ですから、さまざまなことを本当かどうか実践し、体験していくのが大事かな、と私は思うんです。

そしてまた、それを正直に言えるというのが、最も大事だと思うんです。体験したことは勇気を持って発信していかないと、知らないがために犠牲になる方もやはりいらっしゃいますから。知らなかったというだけで、子どもが発達障害や自閉症になってしまった、というようなことがあると思うんです。クスリというのは、副作用がありますから、どうしてもそれを考えておかないとならないわけです。クスリの多くは石油などの化学物質由来の原料を人工的に合成して作られているものです。そのように人工化合物にしてしまっているものをとるというのは、人間だけでなくて、植物にも、環境にも、土にも、あまり良いことではないと思います。

ですから、なるべく自然のものを摂取するということを考えていかないといけないと思うんです。

たとえば私たちは「このお米にはいっぱい副作用のリスクがあるんだよ」と言われたら、そのお米は食べませんよね？　ですから調べるということはとても大事なのです。「子どもたちにとって、環境にとって、地球にとって、自分にとって、本当にこれは危険でないのか？」とか「ガンにならないのか？」ということを、よく調べたほうがいいと思いますね。

それを調べるためには本など、情報を提供する場がなくてはなりません。ですから、橋本さんたちがされている活動はすごく大事なことだと思います。ありがとうございます。

―こちらこそありがとうございます。実は私もずっと病気で悩んだ経験があるんです。以前私はＰＭＳ（月経前症候群）がかなりひどかったんですね。それで起き上がれないようなことが、二〇代からずっと続いていました。その症状が、病院で治療してもまったく治らなかったんです。

それは大変でしたね。痛いんでしょうね。

「～症候群」というのはだいたい、病院でわからないからそういった名前がついているようなものですから、なかなか難しいですよね。それにはさまざまな原因があると思うのですが、その中でホメオパシーは心、体の両方をみていく療法ですから、体だけでなく、心の背景も考えてみるといいですね。自己卑下が多くて、たとえば失恋して「自分なんて女のはしくれにもならない」なんて思ったりしたとき、子宮や卵巣をいじめてしまうんです。女性というのはそういう体験があると、女性特有の病気にかかったり、具合が悪くなったりすることが多いようで

す。

それでまた痛み止めを使い続けていると、効きにくくなるだけでなく、より痛むようになってしまうんですね。この繰り返しを月経前症候群の方々はやっていたりするのです。でも実は治るためには、痛みがつきものなんです。また、月経痛があるのに無理をして働いてきたのでしょうね。

―はい。私は仕事なども男性に負けたくないという感じでやっていましたから、そういう面ですごく無理をしてきたのかなと思います。

よくわかります。私たち女性には、月に一度月経が来ますからね。その時期というのは、ホルモンも一生懸命働いているし、やはりほかの日々とは違うわけですよ。そのときに、自分の子宮や卵巣をいたわるという気持ちを持たなきゃいけないんです。でもいたわっていたら「ほら、女はそうやって月経で痛いとか何とか言ってすぐ休むだろ」なんて言われるでしょう？　多くの女性がそれを言われたくなくて、歯を食いしばってがんばってしまうんですよね。でも、体は「休んでくれ」とメッセージを出しているわけです。それでも「なせばなる」、「がんばらなきゃ。女の人はだめって言われたくないし」なんて思って、痛くても休まないから、体が「この人にはもっと痛みを出さないと休まないんじゃないか？」となるんですよね。それがいたちごっこになったのかもしれませんね。

―そんな感じでした。それでホルモン治療とか、いろんな治療もしたんですけど、全然治りませんでした。

ホルモン治療をすると、内分泌がボロボロになっちゃったりするんですよね。どうでしたか？

―本当にそうなりました。ですから途中でやめてしまったんです。

それで「これはあまりにもおかしい」と思ったんですね。もうこれは医療では治らないんだろうな、というところから疑問を持ちはじめて、代替療法や、病気や体のしくみというものをいろいろと調べるようになったんです。

それで自分なりにわかってきたのが、結局病気の原因になることは自分の中にあったということです。自分自身が歪みや偏りの原因を作ってしまい、間違った方向に行こうとするのを、体が正常に直そうとするんですね。それが病気が治るということで、症状とはその治るときに出てくるものだということです。このことは医師の方を含め多くの方が指摘されていますよね。

さまざまな代替療法で病気が良くなったというケースが紹介されていますが、どんな療法であっても結局同じで、体の持つ治癒力を高める手段なわけですね。ですからその手段を使うことにより、自分の体を正常な方向へ戻せれば、治る機会があるのではないか、と考えたんです。

すばらしい！　そこまで行く人はあまりいないですよ。自分には病気になった責任がないと思っている人が多いですからね。「今までもっと自分の体に優しくしてやれば良かった」と思うことが一番大事なポイントじゃないかと思うんです。

ホルモンが出ていないからといって人工的にホルモンを出そうとしたり、ホルモンが出過ぎ

るからといって止めようとしたりしても、人間がこの精妙な体に向かってできることなんて、ほとんどないんですよ。ホルモン剤しかり、鎮静剤・精神安定剤しかり、痛み止めしかりです。私たちができることは、この体に負担にならないようにいたわってあげることです。これがすごく大事なことなんです。それを自分の体だから「なせばなる」と思って、無理をしてしまうんですよね。

ですから、まず体と和解することです。子宮・卵巣と和解することですね。「今まで無理してごめんね」という一言を、体に言うんです。まずはそれをやるべきかな、と思うんですね。多くの人はそういうことを自分に対してやらないんです。自分自身をほめることが下手ですから。それで「よくやったね、がんばってきたねえ」と言って、さすってあげるとよいかもしれません。

私も潰瘍性大腸炎で、一日何十回の下血で死にかけました。そこでホメオパシーに出合ったんです。ホメオパシーのレメディー（砂糖玉）をとったとき、一番初めにやったのは、小腸・大腸と和解することでした。下腹をさすって、「今までほんとに無理かけたね、ごめんね、ごめんね」って謝ったんです。そうしたら、涙がぼろぼろ出たんです。

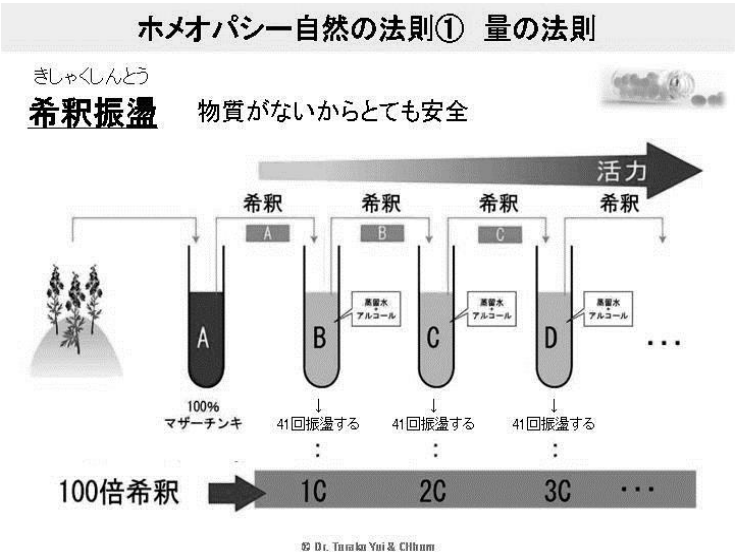
それまでは絶対にそんな弱音を吐きたくなかったんです。私は元気が取り柄で、がんばって男並みに、馬車馬のように働いてきた女だったものですから、腹が痛いとか、調子が悪いからといって仕事を休むことができなかったんですよね。でも「弱音を吐けないというのは本当は弱い人間で、弱音を人前で正直に言えるのは強い人間だ」と思えるようになったんです。

そのとき、私の病気のきっかけと同種のパターンで「死の恐怖と不安」というテーマを持つ、ヒ素を希釈振盪したホメオパシーのレメディーをとったんです。そうしたら潰瘍性大腸炎はどんどん治っていきました。三〇Cといって、物質を一〇の六〇乗倍という天文学的な薄さまで

に薄めたものです。銀河系に涙の一滴くらいの薄さですからね、毒はなんにもないんです。けれど鼻の奥にある、嗅球という脳の一部がヒ素のパターンを記憶していますから、ヒ素の情報だけは私の脳がキャッチするわけです。そうすると脳は「ヒ素が入っているから外に出さないと、体がえらい目に遭う」と思って、「ヒ素を無害化するために免疫力をアップせよ」というメッセージを体に出すんです。それにより体はたとえば亜鉛、マグネシウム、カルシウムなど、代謝を促進するために必須のミネラルの吸収を高め、一方で、酵素をどんどん作っていくわけです。そうすると実際には体にヒ素は入っていないですから、代わりに体に溜まっている毒物や老廃物をどんどん出していくんです。これがホメオパシーで自己治癒力を触発するメカニズムですね。

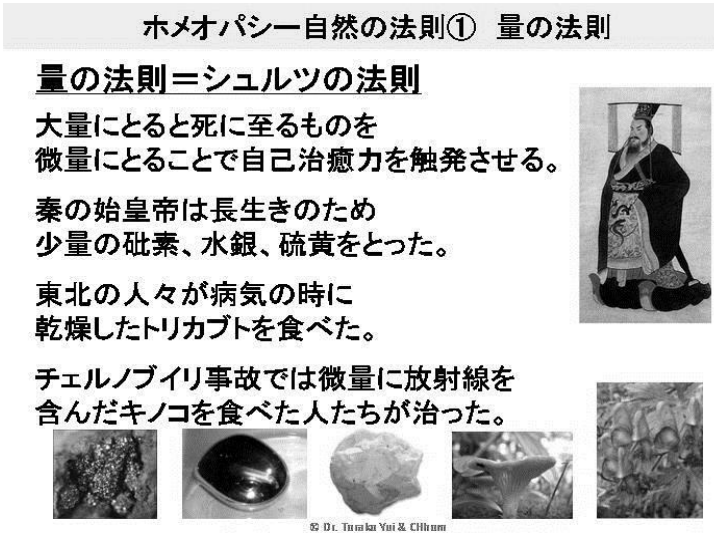
私はそのレメディーをとった後、好転反応が起こり風邪をひいて、四〇度くらいの熱が一〇日くらい続きました。長い間私は熱を出すことができなかったのですが、その一因は体に十分ミネラルがなかったことでした。ところがレメディーによって自己治癒力が触発され、ミネラル吸収も高まり、熱を出すことができたんです。その熱で老廃物を燃やして、外に出しました。そうしたら生まれ変わったような感じになったんです。

ホメオパシーのレメディーは、体だけでなく精神にも効きました。熱が冷めたときに、庭に行き



たくなって、そこに腰をおろしたんです。そして庭の輝くような新緑を見たら、自然たちが生き生きと生きているのが感じられ、涙が溢れてきましてね。「ああ、私はなんて不自然な人生をやってきたんだろう。ずいぶん自分をいじめてしまったなあ」と思えたんです。そうしたら潰瘍性大腸炎がぐんぐん良くなっていって、そのときから約一か月で治りました。体が治るだけでなく、心も治ってしまって、自分を自己卑下する気持ち、自分を責める気持ちがずいぶん減りました。そして何か大いなるものに生かされているということを実感しました。

そんな体験をしたものですから、やはりホメオパシーを勉強したいと思ったんです。その頃はイギリスにいましたから、現地で五年間勉強し、ホメオパスとして同種療法をやることになりました。そうしたら日本の患者さんが増えましてね。当時成田からイギリスまで往復の飛行機代が二〇万円くらいかかっていたんですが、私にみてもらいたいということで皆さんがイギリスまで来てくれるのです。ですから私が日本に行けばもっとみてあげられると思って、日本に通うようになったんです。そうしたら結局患者さんが多くなってしまい、イギリス生活に終止符を打って、日本に帰国したんです。帰国したら今度は私一人に患者さんが山ほどついてしまいました。それが一八年前です。その頃はこういう療



法が日本ではあまりなかったものですから、本当に私一人でいっぱい患者さんを抱えて大変でした。

ですから、これは日本に学校を作り、私のような同種療法士であるホメオパスを育成して、確実にホメオパシーを広めた方がいいだろうと思ったのです。それでロイヤル・アカデミー・オブ・ホメオパシー（ＲＡＨ）を創立しました。学校ができて今年で一六年経ちます。二〇一〇年には新たにカレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー（ＣＨｈｏｍ）と名前を変更し、よりホリスティックに患者さんをみるためにカリキュラムを一新しました。今までに六〇〇名のプロフェッショナル・ホメオパスを輩出し、今では彼らが日本全国に散らばって、ホメオパシー・センターを開いて相談会を行ってくれています。

彼らは日本ホメオパシー医学協会（ＪＰＨＭＡ）認定ホメオパスとして、患者さんの心と体の問題について時間をかけてインタビューし、一人一人に合った同種のレメディーを選択します。患者さんはそのレメディーの刺激を受けていくことで、自らの自己治癒力で治っていくのです。

ホメオパシーというのは、ヨーロッパでは代替医療の花形のようなものです。世界各国で鍼灸くらいの地位があったりするんです。でも日本ではまだなかなか認めてもらえていません。

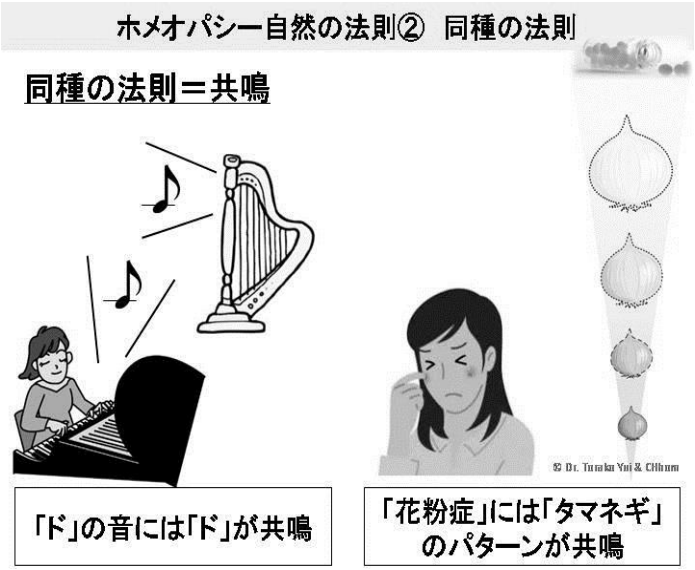
―幸塾の月例会で先生がおっしゃっていましたが、ホメオパシーはヨーロッパでは二か国を除くすべての国で使われ、英国女王もご愛用されていて、インドでも国が認めた三つの第一医学のうちの一つになっているそうですね。そんなホメオパシーが日本でももっと広まればいいと思います。

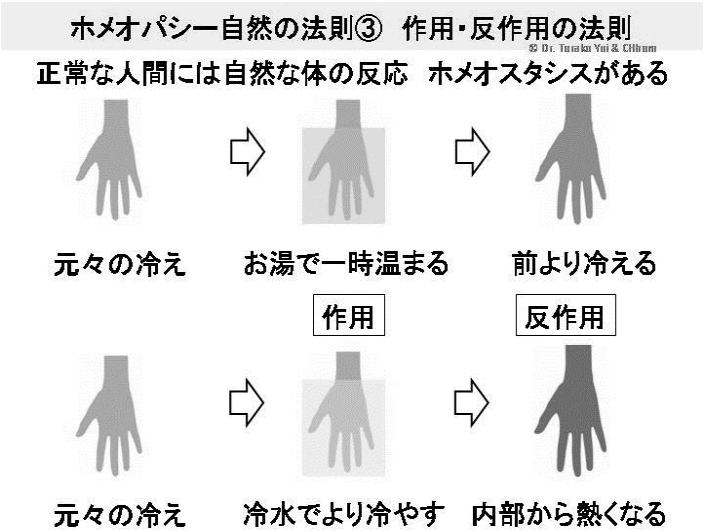
私も、代替療法で体が健康になるしくみというものを自分なりに理解し、調べている中で、

とくにホメオパシーは効果的だという話をいろいろなところで知りました。その後ホメオパスさんやＣＨｈｏｍの学生をしている友達とご縁ができて、いろいろ教えてもらったり、ホメオパシーのホームキットを使わせていただいたりしています。

それは良いですね。ホームキットというのは、自分でちょっとした症状に使えますからね。何かショックを受けて、気が上に上がっている感じだったら、アコナイトというトリカブトを希釈振盪したレメディーをとったり、室内にいて酸欠状態だと思うときには炭のレメディーのカーボベジ、今日は失恋したの、というときの心の傷にはイグネシアをとってみるといいと思います。

ホメオパシーというのは、心・魂・体の三位一体でみるものです。病というのは体だけでは治せないし、心だけでも治せないんです。また霊的（スピリチュアル）な原因と思えるようなものもあって、神様（※大いなる存在といった意）の許しがないと治すことができない場合もあります。私も潰瘍性大腸炎のときは、二年間この病気で苦しんだ後で、やっとホメオパシーに出合えたのです。「今まで自分の体をないがしろにしただろう？」と神様から怒られたような





気がしました。それからはもう少し自分を大事にしようと思えるようになりました。

ホームキットには心や体に合う便利なレメディーがふんだんに入っています。自らの健康を守るためにはとても大切なものだと思います。

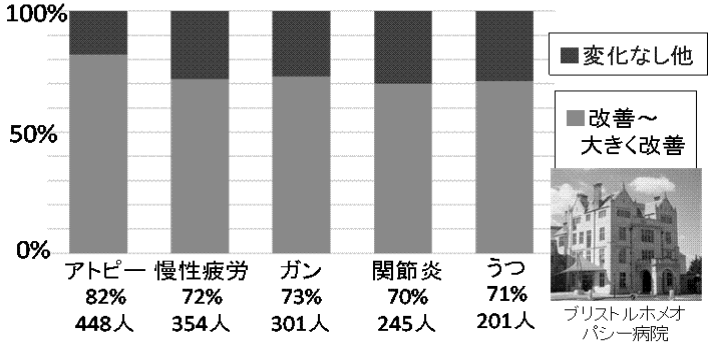
―そのとおりだと思います。私は五歳の娘がいるんですけど、自分が出産前からこういう話を知っていましたので、病院に行く前に子どもの様子を見て、ちょっとした体調不良で問題なさそうだったらまず家で治すようにしています。

娘さんは可愛いでしょうね。何もなければ病院に行く必要はないですよね。ただ、けが・事故のときや、急病のときの緊急病棟はとっても大事なんです。でも慢性病のときは現代医学ではなかなか治療が難しいですね。ですからそういう場合は、自己治癒力を触発するものがいいと思うんです。

こんにゃく湿布でもさといも湿布でもいいんです。そういうものでもいいし、ヨーロッパやインドのお母さんのように、まずは天文学的に希釈されていて副作用がない、ホメオパシーのホームキットを使っていただくのもいいですね。そうやって自己治癒力によって病気を治そうと

世界のホメオパシー

2004年ブリストルホメオパシー病院の患者6000名中
5大疾患(1500 人)の調査結果
レメディー使用後の改善率



イギリスの病院の調査で 50%以上の患者がホメオパシーで症状が改善したと答えている

試みることが大切だと思います。私も、お母さんたちがそういうメンタリティになっていったらいいな、なるべくお子さんや、おじいちゃん、おばあちゃんなどに、副作用のあるものはあまり使わないでやっていただけたらいいな、と思っているわけです。

じゃあ、橋本さんはその五歳の娘さんにもホメオパシーのホームキットを使っていらっしゃるんですね。ホメオパシーの勉強もされていて、すばらしいですね。

―はい。先生の書かれた『ホメオパシー　ｉｎ　Ｊａｐａｎ』（ホメオパシー出版）という本を見ながら使わせていただいています。

この『ホメオパシー　ｉｎ　Ｊａｐａｎ』という本は、もう一五年くらい前に書きましたでしょうか。その頃日本では、私たちホメオパスが圧倒的に少なかったわけです。私が導入しなければホメオパシーはほとんど日本に入ってこなかったんですね。その療法家が少ないのに、患者さんが山ほどいらっしゃるんです。ですから私はお母さんたちに、自分が家族を守るという意識で取り組んでいただこうと思いましてね。一日講座に来てもらい、あとは本とにらめっこしていただくわけです。「症状を見て、この本からひもといてみれば、だいたいどのレメディーがいいかということはわかるでしょう？　だから自分でやってみてくださいね」ということですね。

そうしたらこれがすごい効果を現しましてね。多くのお母さんがたが本を持ってくださって、ちょっとばかりの熱、下痢、歯痛、頭痛といったときに、みんなホームキットを利用され、使ってくださっています。

―はい。本当にちょっとした不調にいいですよね。ホームキットや各種レメディーなどは、今

では日本でもホメオパシージャパンなどから購入でき、大変身近な存在となっていますね。私の娘も中耳炎になったときに、病院にずっと通ってもなかなか治らなかったんですけど、ホメオパシーを使った後にすぐに良くなって、そのときはすごく助かりました。

そうですか。そういう体験があると、やはりこれはいいもんだなあって思いますでしょう？ですから、希釈振盪して物質がないから効かない、なんていうふうにドグマティックに、狭い了見でいるんじゃなくて、まず使ってみましょう、と皆さんに言いたいですね。それで良い体験があるとまた使ってみたくなりますしね。

中耳炎というのは、耳に膿が溜まって、切開してもまた溜めていくんですね。ですから、耳の穴から自分でいらないものを出したり、熱を出して、出しきったときに、もう二度とそういうふうにならなくなりますよ。体に膿が溜まっているからこそ、いろいろな穴という穴から出るんです。そもそも発熱、湿疹、咳、下痢、嘔吐などの症状は病気ではなく、老廃物を体から出そうとしているのです。ですから出しきることが大事で、症状をクスリで止めて抑圧しないことです。

―私もドライアイで目がすごく痛いときに使ったら、目やにみたいなものがどんどん出ました。

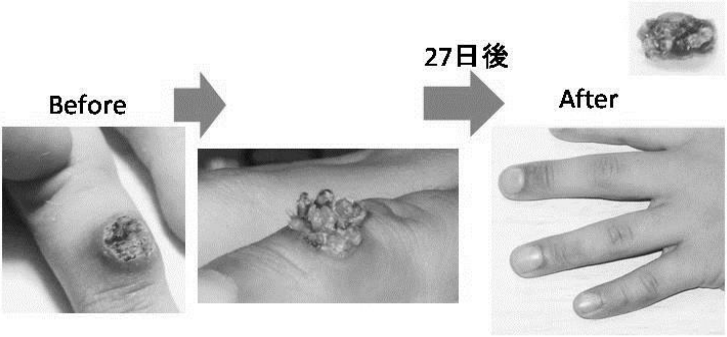
出ましたか。それが好転反応というものなんです。体が治るときはタダじゃすまされないということがあるんですよね。レメディーをとったらすぐに治るんじゃなくて、とることによって免疫機能が刺激され、免疫が高まって、不要なものを外に押し出し、吐き出します。そうするとやはりどうしても老廃物がどこからか出るんですよね。それは心の面でも出ますから、レメディーを入れるとなぜかプリプリ怒ったりするんです。それもいいと思います。

―昔の経験を思い出して、泣いたり怒ったりしたあとは、すっきりしますよね。

そうですよね。未解決な感情体って、山ほどあるでしょう？　それは誰もが持っているものなんです。それをみんな「怒っちゃいけない」とか、「ここで泣いちゃいけない」なんて思って、飲み込んでしまうんですよ。でもそれは飲み込んでいるだけだから、解決はしていないわけです。だからレメディーをとると、昔のつらかったことや悲しかったこと、腹が立ったことなどが、わーっと出てくるんです。そういった感情の排出もあるんです。これも好転反応ですね。

―はい。でもこういった療法を知らないでいる方も多いですよね。私はホメオパシーで対処した症例のケースなどを何度かＤＶＤで見せていただきましたが、とくにお母さんの中で、子どもの発達障害などで苦しんでいる方がすごく多いように思いました。

ケース　指のイボ



© Dr. Tanaka Yui & Chinm

指のイボがホメオパシーをとってから膨らみ、２７日後にきれいにとれた

発達障害で自閉症と呼ばれたり、アスペルガー、多動、注意力欠陥といったことを言われると、多くのお子さんは学校からも友だちからもボイコットされることが多いのです。そうすると、お母さんも「何でこんな子を産んだんだろう」と自責の念になってしまって、子どもと一緒に自殺しかねないこともあります。そんなお母さんが私の相談会に来られて、「何の因果で自分の子どもはこうなってしまったんでしょうか」と言って泣くんです。そのときに、私も子を持つ親として、何とかして助けてあげたいと思うんです。

私のほうはホメオパスという職業を始めて二〇年になりましたので、それだけ長く続けてくると、一つの統計が見えてくるんですね。自閉症についての研究をずっと長年やってきた結果、予防接種によってこの子たちは自閉症になっているのだろうということがよくわかったわけです。

まず私は子どもが打つ九種類の予防接種のワクチンを希釈振盪して、レメディーを作りました。自己治癒力が低下した原因がこの九種類の予防接種だと体が認識しているのであれば、またそれを希釈振盪してパターンだけを与えることによって、体が「俺は、これによってエライことになったんだぞ！」というふうになって、二度と入るなとばかりすごい抵抗を示すんです。

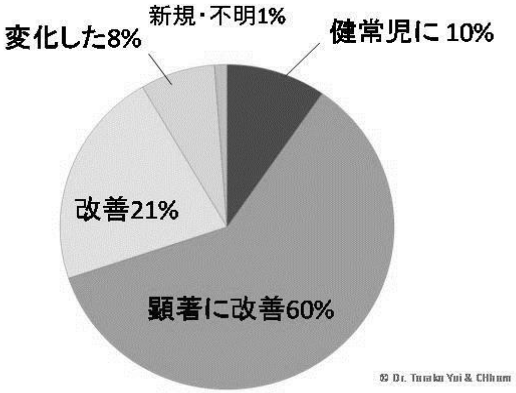
もちろんレメディーの中には予防接種に入っているような有機水銀、水酸化アルミニウムの原物質が入っているわけではなくて、希釈していますから、水銀やアルミニウムのパターン（情報）だけがあるんです。いわゆる波動のようなものしか入っていないわけです。ところがその情報によって体の自然治癒力が刺激され、ミネラルを使っていらないものを外に押し出す力が体にできてくるわけです。そうやって体に入った水銀やアルミニウムも排泄されるんです。

そのように、病気の原因となったものを希釈振盪して与えるというのは、私たちの同種療法の妙であり、とても大事なポイントであるわけです。花粉症になっているんだったら花粉を希釈振盪し、黄砂で鼻水が出ているんだったら黄砂を希釈振盪したレメディーを与えると、自然治癒力が働きます。放射能で白血病になったら、プルトニウムを希釈振盪したレメディーを与えると、白血病という症状を改善するための体の免疫機能が働くわけです。量の法則があり、大量では病気を作るものが、微量では体の機能を触発して排泄を高めるという同種療法ができあがるわけですね。

これまでの経験を通して、私は、自閉症や多動、ＡＤＨＤなどの病気の原因は予防接種だろうと予想を立てて、レメディーを出してきました。その結果どうなったと思いますか？　九一％が改善に向かっていったんです。これは驚くべきことだと思いませんか？

あとの九％は改善しませんでした。その九％の中には、すでに水銀の影響によってＤＮＡが異常になっていたり、一歳までの脳形成期に、神経伝達と関係するミエリン鞘が有機水銀によって破壊された可能性が考えられます。

子どものアトピーのケース。全身のアトピーが一度ひどくなった後に肌がきれいになっている



由井先生のクライアントのうち発達障害児 99 名について、家族にアンケートをしたところ、91%が改善したと答えた

日本は明治時代から一〇〇年以上にわたって、罰則まで作って何回も何回も予防接種をさせている希有な国なんです。予防接種被害で国と製薬会社を相手にした訴訟が相次いだため、法律が改正され、一九九四年には大半の接種が義務接種でなくなりましたが、水銀の入った予防接種をこれほど長く義務で続けてやってきた国は、ほかにはないと思います。日本人の体内水銀量の多さは世界ナンバーワンだと聞いています。そのため、何の病気であっても、日本人が水銀を希釈振盪したレメディーをとると良い結果が現れます。

いずれにせよ現代医学で治療法のない発達障害の改善率が九一%というのは、注目に値すると思います。ですからお母さんがたが求めてやまないのがやはりホメオパシーなわけです。顕著に良くなっているのがわかり、今まで自閉症や発達障害のお子さんたちには朗報がまったくなかったところに、ホメオパシーという恩恵を受けられたわけですから。ですからぜひホメオパスにかかっていただきたいんです。

精神面へのアプローチは？

―それでは、今と重複するような話もあると思いますが、ホメオパシーに関する先生の取り組みについて、基本的なところを少しずつお聞きしていきたいといます。まず、先日幸塾で紹介されていた『精神科は今日もやりたい放題』（三五館）という、お医者さんが精神科医の内情を露呈した本があります。精神的疾患をクスリで治すことについては、今、あちこちで疑問の声があがっているようですね。精神的な病について先生はどのように考えておられますか？　また、ホメオパシーではどのように解決されているのでしょうか？

私もその本を読みましたが、さすがですね、そのとおりだと思いました。

私の所にも、統合失調症やうつ病の方、夢遊病で夜徘徊してしまうお子さんなどがたくさんいらしています。

その中でやはり、なぜそうやって精神が病んでいくのかという、大きな原因を見つけなければならないわけです。

お話を伺っていて思うのは、精神を病んでいる多くの方というのは、大変大きな喪失感を味わった経験があるということです。失恋したこと、会社で責められたこと、子どものときにお父さんとお母さんにお前はダメだと言われ続けていたこと、大学受験に失敗したことなど、き

つかけが必ずどこかにあるんですね。それを見ていますと、やはり自己否定感というのが統合失調症などの精神疾患を作っていくのかなあと思うんです。

統合失調症やうつ病というのは、他人が何かを言ったからなるのではありません。自分自身が自分を否定してしまうときになるのです。自分がここに存在してもいいんだ、生きていていいんだというような確固たる安心感が少なくなると、人間は「自分はだめなのかもしれない」、「本当は自分は人と違うんじゃないか」、「これもできない自分は本当にダメな人間だ、クズだ」と自己判断をするんですね。

多くの人が他人から「おまえはダメな人間だなあ」とか「おまえは生きていてもしょうがない人間だ」などと、いろいろ言われているわけです。そう言われても右から左に流すことができればいいのですが、精神を病む方というのは深く自分のところに落とし込んでしまって、「そうだ、これもできないから自分はダメだ」、「あれもできなかった」、「昔もこうだった」といって自分を責めてしまうんです。

失敗したときというのは、後悔するのではなく、なぜ失敗したのか分析するほうがずっと大事なのに、最初から後悔して、「ああ、自分はこういう人間だからダメだ」と自己判断するわけです。そのように自分が自分を否定してしまうことが人間の一番深い傷になっていくのです。

人間には、悲しい、苦しい、つらい、それから喜び、そういうものが必ずあるわけです。ところが、自分が今すごくパニックになっているんだ、ものをぶっ壊したいんだ、ものすごく怒っているんだ、とても落ち込んでいるんだ、といった感情があっても、それを嫌がって、抗うつ剤、抗不安剤、抗精神剤をとりますと、出ている感覚そのもの、感情を抑圧してしまうんです。そうしたら感情がフラットな人間になっていって、これはもう生ける屍（しかばね）になってしまいます。要するに喜怒哀楽もわからなくなるわけです。実はホメオパシー的に一番重い病気は、がんなどではなく、こういった無感情、無感動なのです。

本来人間は、一日の中でも感情が上がったり、下がったりするものです。でもそれこそが生

きている証なのです。苦しいと思うこと、辛いと思うこと、悲しいと思うこと、まさにそれが人生なんです。

ですから、統合失調症やうつ病の方々は、あまりに多くのつらさや、大きな悲しみ・苦しみを体験してしまったのだろうと思います。そこで耐えきれなくなってしまい、もう自分の感情を感じていたら自分が壊れるから、生きていくためにそれを感じなくしてしまったのでしょう。それがつらいときに耐えるための一つの手段だったからです。

そんなときにホメオパシーでは、悲しみには悲しみのレメディー、つらさにはつらさのレメディーを出すんです。そうしてもう一回そこと向きあおうとするわけです。

その中でつらくなった人たちから、電話がいっぱい来ますよ。

たとえば、患者さんがお父さんに虐待され、たたかれて、性的な虐待もされたことを思い出して、つらくてどうしようもないというときに、私はすぐ電話に出ます。そして励ましの言葉をかけます。ホームケアのキットも持っていただいていますから、フラッシュバックのように映像が現れるときにはオピウムを、怖いんだということなら恐怖のレメディーであるアコナイトを、もう怒りがわき上がって苦しくて仕方ないんだというときにはスタフィサグリアという怒りのレメディーを、イライラして神経が立ってしょうがないというときにはナックスボミカというレメディーをとっていただくんです。そのときそのときに出てきた感情によって合うレメディーがあるわけです。

患者さんは未解決な感情で満杯になってしまっているのを、無理やり抑えてきたわけです。その風船の口をゆるめてプシュッとやるのがホメオパシーのレメディーなんです。

人は悔しいときはね、枕をなぐるんです。壁を蹴るんです。何のために布団があるの？　バリバリやって、ガラスが割れても仕方ないんですよ。だからお母さんが「子どもがどんどん暴

れてる」って言うときには、「お母さん、もう何でもいいから投げさせて、暴れさせてちょうだい」って言うんです。「ガラスが壊れても机が壊れても、この子の心が壊れるよりいいじゃないですか」って。そういう子は今まで暴れたくても暴れられなかったんです。それくらいの怒りをぐっと抑えてきてしまったわけです。

ほら、日本では「いい人にならなきゃいけないですよ。お天道様が見ていますよ。世間の目がありますよ」といって、いい人を演じないといけないところがあるでしょう？　それで多くの人が怒りを抑えているんです。誰もがいい人に思われたいがために、本当の感情を抑圧していることが多いのです。

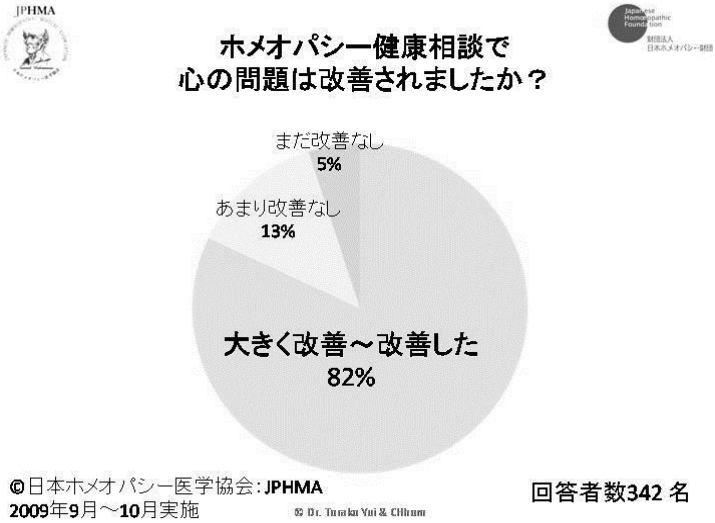
だけど人間だから、腹が立つときだってあるのです。しょうがないじゃないですか。だから何か言われたとき、「あのね、今、あなたに言われたことでこんなに腹が立っているの」ということは言ってもいいんじゃないですか？　それを大人げないって言うのは、私は違うと思うんですよ。そういう感情の表現がちゃんとできないから、未解決の感情だらけになってしまうのです。「腹が立ってる」と思ったらしっかり言ってもいいと思います。感情をどうしても出したくないなら、一度その場を去るようなときがあってもいいと思うんです。

そして、「なぜ自分が今、相手のこの言葉で腹が立ったのか」というのを、自分に問いかけなければならないですね。それは相手が言ったから腹が立ったのではなくて、昔、それと同じような言葉をお父さん、お母さんなどから言われたりしているはずなんです。その傷が癒えていないから言われたくないと思っていたことを、誰かに言われてむかっ腹が立つわけです。

子ども時代に愛されず否定されたという意識を「インナーチャイルド」というんですけど、それを見ていく訓練をしていかなきゃならないんですね。それでいろいろな感情が出てきたときは「感情日記」を書きなさい、と私は言っているんです。「この野郎！　もうお前なんか殺してやる！」だっていいんですよ。だって書くだけなら別にいいじゃないですか。いっぱい書いて出してください。それを三日後に読むと、「あら、こんなにわたしは怒っていたんだ」ってびっくりしますよ。でもそうやって出していけば統合失調症やうつ病にはならないんです。泣いて、怒って、苦しんで、そしてまた喜びも出していくんです。

―自分で抑えつけずに出せば、自分らしく生きられるようになるんですね。

そうですね。日本では道徳の縛りがけっこう多いんです。女の人は木に登っちゃいけないとか、初めて子どもが生まれたときは誰でも新米ママで、何もわからないのに、子どもを泣かせていると「母親なのに」と言われたりしますよね。今までバッグや靴や服を買いに行くとか、旅行に行くといった、自分の好きなことがで



JPHMA のホメオパシー健康相談を受けた人へのアンケートでは、82%が心の問題が解決したと答えている

きたのに、お母さんになれば急に子どもの命を預かるわけです。夜中でも二、三時間に一度おっぱいをあげるとか、突然そういうことをやらないといけなくなって、自分のことは何もできなくなるでしょう？　その上世間からはちゃんとしたお母さんであることを要求されるわけです。ですから多くのお母さんは苦しむわけです。

そういう新米ママたちの苦しみもまたホメオパスは聞いてあげています。自分以外の命のために一生懸命尽くすという、本当の大人になるための修行をしているお母さんたちを、助けてあげたいと思うからです。

私たちホメオパスは、一時間以上かけて話を聞きます。人はみんな理解されていいのです。そして、なぐさめてもらいたいのです。誰かに心の内を聞いてもらえるだけでも癒されるのではないでしょうか。

統合失調症やうつ病の方々は、誰かが親身になって話を聞いてあげたことがあったか、ちゃんと理解してもらえることがあったか、それがあったかどうかだけなんです。そんなふうにきちんと彼らの言い分も聞いてあげるというのは、すごく大事なことかな、と思います。そして彼らの気持ちに共感し、受け入れてあげることです。もちろんそれができるよう、療法家自身も心の傷、インナーチャイルドを癒す必要があります。

―やはり自分がダメな人間だと思い込んでいる人には、「そうじゃないんだよ」ということを誰かが言ってあげることが大事なんでしょうね。

そうですね。そういうことが大事ですよね。だってこうやって、みんな命をもらって、肉体をもらっているんです。神様からいただいた命で、この世で肉体をもらい、自分がやらなきゃ

いけない今世の宿題をやるわけじゃないですか。それなのに神はあなただけが劣っているなんて思うでしょうか？　「万物斉同」っていうんですけど、みんな平等なんです。甲乙丙もなく、誰もがみんな神様には平等に愛されているんです。

だけどそのような感覚をどこかで失ってしまった人たちが大勢いるんです。人生があまりにもつらかったから、あまりにも悲しかったから、そこで神を見失ってしまったんです。誰かに言われたことで傷ついて、神と一体であるという充足感が得られなくなって、自分を責めてしまったんですね。自分を責めるとやはりうつにならざるを得ないんですよ。

ホメオパシーの父であるハーネマンさんが初めて精神病棟に勤めたときの患者さんは、さるぐつわをはめられたり、足かせ・手かせを着けられたり、食べ物も腐ったものを食べさせられたりと、監獄よりももっとひどいような、とても非情な扱いをされていたようです。それを見てあまりに可哀想で、治療家として涙が吹き出たそうです。

そのときにハーネマンさんは、「ここにいる精神を病んでいる人たちの三分の一はバレチュームアルバム（バイケイソウのレメディー）で治るんだ」と思ったそうです。バイケイソウはもちろん猛毒ですが、それを希釈振盪して毒をなくした形で、患者に与えたんです。そうしたら多くの精神病棟にいる方々が治っていったそうです。

バイケイソウはプライドが傷ついて、ものすごく心がズタズタになった人に合うのです。天国から地獄に転げ落ちた人ですね。だからそういう人はバイケイソウの恩恵をもらう必要があると思います。

統合失調症の方にはアコナイト（トリカブト）やバレチューム（バイケイソウ）などの猛毒植物がよく合います。そういった植物は、人間を殺そうとして生えているわけではなく、人間が知恵を使い、加工すると良薬になっていくのです。そのために神がこれらの猛毒植物を創ってくれたのだと感謝したくなりますね。私もまず統合失調症の方には、そのバレチュームアル

バムというレメディを出しています。

発達障害や子どもの病気について

―先ほども少しお聞きしましたが、発達障害や子どもの病気についてのお話をお聞かせいただければと思います。

ＤＶＤで症例などを見ていると、お母さんの体内にあった薬物や、自然でないもの、とくに予防接種で入ってしまった水銀などが、病気や異常の原因だと判断されることが非常に多いことに驚きました。

予防接種については、私も今まで効かないものもあるといった話は本で読んだりしていたんですが、その害についてはあまりわかっていませんでした。最近になって調べたら、とくに中に入っている水銀によって自閉症が起きる可能性があるということを、今いろいろな人が指摘されているようですね。それに関してはＷＨＯでも警鐘を鳴らしているということを聞きました。ホメオパシーのケースでも、水銀などの毒物を出すレメディーが実際に効果を上げていたので、やはりワクチンに含まれる水銀などに問題があるのかなというふうに思うようになりました。

このようなことは今の世の中ではまだ理解している人がごく少数だと思いますので、予防接

種によって子どもたちが病気になるメカニズムを、少し詳しく教えていただけないでしょうか。

まず、予防接種を打つのは、子どもが乳児のときからですから、まだ自己免疫ができていないわけです。その頃赤ちゃんは脂漏性湿疹になったり、突発性湿疹になったり、下痢をしたりして、親からもらった体内の老廃物を出しています。炎症を体験し、免疫力を上げていって、一歳までに自己免疫ができてくるわけですね。それまでは胎児のときに母体から受け継いだ免疫や、母乳からきたお母さんの免疫に頼っています。

けれども、予防接種はその自己免疫ができる前に打ちはじめてしまうんです。しかも皮下注射で打ってしまうんです。口から菌や水銀が入るわけではないんですよ。口、喉、気管、腸の中にはお母さんからもらった免疫や自然免疫があり、いろいろな異物が入らないように守っています。皮下注射で打つというのは、つまり、それらの免疫機能を迂回して体内に入れてしまうということなんです。

予防接種というのは、猛毒中の猛毒、抗がん剤に次ぐ猛毒だと私は思っています。それはなぜかと言いますと、いろいろな化学物質や菌そのものが入るからです。エチル水銀、水酸化アルミニウム、ホルムアルデヒト、それから抗生物質、スクワラン。スクワランは多発性硬化症やギランバレー症候群を作る原因といわれています。そして動物に使うと不妊になってしまうのです。また、菌を動物で培養しますから、どうしても動物のたんぱくも含まれます。菌を培養する細胞がすでにさまざまな病原体でおかされていることも多く、そのような病原体の混入も大きな問題です。ＤＰＴ（三種混合ワクチン）でしたらジフテリア、耳下腺炎、破傷風の三種類が一気に入ります。それは自然界ではありえないことです。

こんなに山ほど毒物が入ったワクチンを、まだいたいけな三か月にもなっていない赤ちゃんのうちから腕に皮下注射で打ち、血中に入れてしまうということが、どういう行為なのかをしっかりと理解してほしいと思うのです。たまたま自閉症にならなかっただけで、予防接種はロ

シアンルーレットのように怖いのです。

それでも多くのお母さんたちは予防接種を打とうとします。なぜそうなってしまうかというと、すごく宣伝がなされていましてね。まず「予防接種」という名前がすばらしいですよね。病気を予防する予防接種。これは私から見ると、病気を予約する「予約接種」と言ってもいいんです。実は多くの人がこれを打って病気になっているのです。では病気になったら、誰がもうかりますか？　ということです。

病気になれば、いろいろなクスリを使ったり、病院に行ったりしますよね。その利益と権利の構図の中で、子どもたちが犠牲になるのはいかがなものか、と私は思っているわけです。ですから、犠牲になりたくなかったらお母さんがたが賢くならなくてはならないんです。

とくに日本なら、栄養は足りていて、衛生もしっかりしていますから、発展途上国で衛生状態の悪い地域の子どもたちとは違うわけです。ところがメディアは、はしかや水疱瘡にかかってお子さんが亡くなった方々の声を大きく取り上げます。そこで多くのお母さんがたが、「うちの子が死んだらどうしよう」と不安になるのです。

ところが実は、はしかで亡くなったり、後遺症が残って苦しんでいるお子さんたちの多くが、はしかにかかってから解熱剤をとらされて解熱剤脳症になったり、湿疹がいっぱい出たからといって軟膏を塗られ、湿疹を抑圧されることで脳障害を起こして、亡くなったり後遺症が残ったりしているわけです。そのように子どもたちが病気ではなく、クスリで抑圧したために亡くなっているという事実は、しっかり言うべきだと思います。

子どもというのは、親や先祖代々から受け継いだ老廃物や、自分でおっぱいや離乳食からもらった老廃物が、いろいろと溜まっていって、充分溜まりきったときに、はしか、水疱瘡、耳下腺炎といった子どもがかかる病気にかかって、外に出していきます。子どものかかる病気は、

老廃物が出てとてもありがたいんです。ですからかかったら、かかりきり、ひききるんです。そうすると免疫ができます。体が学習するんです。

そうやって小児病を体験させ、学習させることが大切なんです。そのような感覚をまずお母さんがたが持つことが大事だと思います。まだ学習できないうちに予防接種をすると、そういうものが未解決のままずっと血中に残って、解毒するのに一六年から一八年くらいかかるんです。ですから大学に行ってもう一回はしかの菌を測ってみたら、はしか菌の抗体がなかった、ということになるんですよ。

体内にはしか菌の抗体があるということは、はしか菌が未解決のまま体に入っているだけで、体の中で学習しているわけではないんです。ですから「抗体」＝「免疫（の獲得）」ではないということなんです。

つまり体内に抗体がたくさんあるということは、山ほど異物や毒物があって、とりあえずそれらを無害化し、適応しているだけということです。そうすると、免疫細胞はその抗体のついた異物や毒物に向かって攻撃していきます。ですから関節や心臓弁などに抗体のついた異物がいっぱいたまってしまうと、自分の免疫が自分の体を攻撃しはじめます。またこれら異物によって細胞が変化しますので、その変化した細胞もまた異物と認識され、同じように自分の体を攻撃します。これが膠原病などの自己免疫疾患につながるのです。そこがホメオパシーの病理「抗体」＝「免疫低下（膠原病など）」と現代医学の病理「抗体」＝「免疫（の獲得）」という、生命に対する考え方の違うところです。

私は実際にワクチンのレメディーで改善した多数の症例を見ていますから、抗体を作る毒物、病原体、菌などをわざわざ入れるというのは恐ろしいことだと思っているのです。

つまり、予防接種は子どもを病気から守っていない、未解決のまま一足飛びに慢性病を作っているだけだということです。

このことは『予防接種トンデモ論』（ホメオパシー出版）という本に書きました。そうしたら英語やドイツ語でも同じことを書いてくれといわれて、英語、ドイツ語でも出版したんです。ドイツではホメオパシーなどの療法に関する本を何万冊も出している出版社で、この本の売り上げが半年ほどで一三〇〇冊を超えてベストセラーに入りまして、すごくありがたかったです。

つまり日本だけでなく外国でも、みなさんこういう情報を求めていたんですね。これは調べちゃいけないことを私が調べて書いてしまったんだろうな、と思います。でもこのことは、人道的な問題ですからね。人権として知っておかないといけないことだと私は思います。

もっと詳しい話は『予防接種トンデモ論』に書いてありますので、ぜひ読んでいただきたいと思います。

多くの国内外のホメオパスの中でも、予防接種が害になって病気を作っていることを、知っていても言わない人がいます。自分の身を守るためには外から軋轢（あつれき）が来ないようにと思っているのかもしれません。しかし実際ホメオパシーの相談会をやっていると、多くの患者さんが医原病（クスリや予防接種からくる病気）に苦しんでいるのは一目瞭然です。心あるホメオパスは勇気をもってその事実を伝えるべきだと思いますね。私が会長を務めるＪＰＨＭＡのホメオパスには常々そのことを伝えています。

また病気の結果、いろいろな老廃物を出しているのが症状ですから、この症状を止めるようなクスリを使っても、本来の自分が全面的に自己治癒力を使って治したことにはならないわけです。熱を出しきる、咳が出たらタンを出しきる、鼻水も出しきる、中耳炎でも膿を出しきるんです。それをわかっていただけるように、『症状はありがたい』（ホメオパシー出版）というＤＶＤも作りました。それを見ていただき、どうすれば健康に生きられるのかを考えていただきたいのです。

ただ、現代医学のすばらしさはもちろんあるんです。骨がボコッと折れているなら、緊急病棟に行って手術しなきゃしょうがないでしょう？子どもを産みたくても頭がつかえていたら、帝王切開しかないじゃないですか。現代医学のすばらしさは、緊急病棟、けがや事故のときの治療、検査といったところにあるのではないかと思うんです。そのような場合以外は、やはり出しきる、かかりきるというやり方が、一番いいのではないかと私は思います。

そして大切なのは、小児病はありがたいと思える心を養うことです。

お母さんがた、病気を恐れていては、いつまでたっても予防接種やクスリは減らないでしょう？

予防接種が悪い、クスリが悪いと言う前に、病気を恐れる私たちの心がこれらを繁栄させているんだと理解することがもっとも大切なことです。

―なるほど。先生のそういう予防接種への考えや発達障害へのアプローチは、ホメオパシーの業界でも最先端なわけですね。

そうですね。最前線を行っていますので、海外の学会などからもよく呼ばれます。しかも私が三位一体にしたアプローチは、由井寅子の三次元処方と呼ばれて世界に広まったんです。これは今、日本から出たホメオパシーのメソッドとして、Ｚｅｎ（禅）メソッドともいわれ、世界各国で効果を上げています。Ｚｅｎ（禅）とは座禅の禅のこと、つまり自分を見つめていくということです。なぜそれがいいかというと、原因、結果、解決法も全部自分の中にあるからですね。ですから、魂と心と体を三次元で、全体的にみながら、レメディーを朝昼晩と出していきます。

このＺｅｎ（禅）メソッドは今まで治すことが難しかった難病にもとても有効なのです。それで海外にもあちこち呼ばれて講演をしているんです。

―私が予防接種に関するさまざまなデータを見る限り、ほとんどの接種というのは効果がないように思えるのですが、中には効果がないわけではないものもあるように思います。そうするとやはりお母さんたちは、すごく病気について心配して、効くものがあるんだったらやってみようかという判断をしたりすると思うんですが、先生はやはり全部の接種をやめた方がいいと思われますか？

私が今までやってきた経験の結果では、予防接種は何も役に立っていません。それどころか病気を作っています。このことは私が二〇年研究した結果ですので、はっきり言ってもいいかなと思うんですね。

だからといって、お母さんが病気になることをすごく怖がっていたら、私の口から「お母さ

ん、予防接種はやめなさいよ」とは言いません。自分でいろいろ見てもらい、調べてもらって、「それでお母さん、どうしますか？　自分で考えてくださいね」というのが私のスタンスです。

もちろん私は、自分の子どもにはさせませんし、親戚・縁者にもさせませんでした。

人間には病気になってもそれに対処する力があるわけです。私どもも、皆さんがその対処する力を使うときにサポートできるよう、子どものかかる病気に使うキットを作りました。子どもがかかる病気になったら、お子さんにすぐとってもらうのです。三日はしか（風疹）には三日はしかの、はしか（麻疹）にははしかの、水疱瘡には水疱瘡の、溶連菌には溶連菌を希釈振盪したものを揃えてあります。私たちホメオパスは、そういうものを使っています。お子さんたちが自分の体で治すだけの力をつけて、しっかりかかりきり、学習して免疫もできるのですから、お母さんがたも安心できるでしょう？

でも、病気に対してすごい恐怖があるのに打たないでいて、その結果か偶然かはわかりませんが、子どもの調子が悪くなって、「打たないでいたからこういうふうになったんだ」と自分を責めるくらいなら、打ったほうがいいんじゃないでしょうか？

けれど、予防接種を打ってもその子が発達障害にならなかったこと、ギランバレー症候群にならなかったこと、すごく具合が悪くならなかったことに対して、神様にありがとうと言うこと、それだけは忘れてはいけないと思うのです。

つまり予防接種はそのくらい恐ろしい猛毒だということです。何度も言いますが、ロシアンルーレットのようなものです。

何もなく無事だったというのは、その子の根本体質の強さがあったということです。それはもう神の恩恵があったからだとしか言えません。だから打つときには、それぐらいの副作用があるものだと思って、覚悟して打てばいいのかなと私は思いますけど。

―そうですか。そこまでリスクが大きいんですね。

大きいですね。もちろん予防接種したらその病気にはかかりにくくなりますよ。でもかからないのが良いことだと思ったら大きな間違いなんです。自分の血中に病原体を持っていて、外から飛んでくる病原体に対して反応しないというのは、体の中の病気の方が大きい毒を持っていて、それに比べて外の毒はたいしたことがないということなんです。つまり、病気には親分・子分がいて、自己治癒力は最も大きい病気の親分のほうに向かうのです。ですから外から来る病気の子分に反応できないということになるんです。

予防接種によって最も大きい病気を血中に入れられるということは、体に重病を持つということです。つまりたくさんの抗体を持っていてそれが減らない状態です。病原体がたくさんいて、しかも排出することができない状態だともいえます。

言い換えれば、慢性病を持っているから、急性病を起こせるほどの余力がなくなっているということです。残念なことに、はしかならはしかの症状を出せるほどの力がないということです。ですから予防接種した人に限って、大人になって抗体が切れると、はしかにかかったりしますよね。そうすると重病になったりします。

ある人は、はしかに三回かかりました。一回目は親がかかりきっていないはしかを出し、二回目に予防接種のはしかを出して、三回目に本当に自分がかかったはしかを出したのです。

―はしかにかかったとしても今の日本では医療も進歩して、死亡する確率は非常に少ないそうですね。またはしかにかかったことで問題が起きるのは、症状を出しきらず防いでしまったケースだということですね。本当にお母さんたちには、こういう情報をもっと知っていただいた

上で、判断してほしいと思います。

はしかを途中で、クスリで止めないことです。はしかで亡くなったというお子さんのほとんどが、はしかの湿疹を止められたり、はしかの熱を止められたりしています。

予防接種をするのかしないのか、自分の子どものことは、親自身が判断しないといけませんが、そこで判断する材料がなければ判断できません。国や行政のメディアではあまり予防接種の害を表に出していないのです。ですから判断するための材料を、私は講演会で出し、本で出しているわけです。またＪＰＨＭＡのホームページやホメオパシーとらのこ会の会報誌「オアシス」でもお知らせしています。

でもそういった情報を提供したあとは、「さあ、お母さんどうする？」と問いかけるしかないですよね。その後予防接種をしても、私は責めません。それは子どもを思ってお母さん、お父さん、おじいちゃん、おばあちゃんたちが出した結論ですから、それはそれでいいのです。

人間は一人一人、何かを信じる権利があります。「予防接種はすばらしいんだ」と心から思っている人に、「予防接種は体を害する」と言っても、聞きたくない人、知りたくない人も多くいます。「予防接種は素晴らしいのだ」という一種の信念の病気もあります。ガンより何より、信念の病気は一番重いとホメオパシーの創設者ハーネマンも言っています。

食と農業とホメオパシー

―由井先生は自然農をされ、農業生産法人を立ち上げるなど、農業の分野でもさまざまな取り組みをされていますね。幸塾の講演でも、農業をやることで無の心になり、忍耐力がついて、自然環境とチューニングできるといったお話をされていました。先生が手を振ると植物も手を振ってくれるような動きをするそうですね。先生が農業をはじめるきっかけは何だったんでしょうか？

最初は私の患者さんで、若いのに痛風になって足の先がすごく腫れ上がっている人がいたんです。痛くてハイヒールも靴も履けないからといって、サンダルで来たんですね。そういう人が増えてきて、「なんでだろう？」と思って、レメディーをいろいろ試したんですが、なかなか治らなかったんです。それで、「あなたどういう食べ物を食べているの？」と聞いてみたら、農薬や化学肥料がかかっている野菜などを食べていたんですね。確かに、戦後日本では米国などから農薬や化学肥料を使う近代農業化をすすめられていたため、その当時無農薬の作物はあまり出回っていませんでした。

農地では肥料に窒素・リン酸・カリウムをまきますよね。これが人工的に作られていて、しかもこの中に含まれる硝酸態窒素というものが、痛風を作ったり、肝臓を悪くしたり、しまいにはガンを作るといわれています。そういったものが作物の中にも入ってしまうわけです。硝

酸態窒素を使っていて、妙に緑鮮やかな青菜なんていうものがありますよね。そういうものをいっぱい食べれば、野菜についている硝酸態窒素を体が吸収します。硝酸態窒素は牛なんてもう食べるとイチコロというくらい、すごく危ないものなんです。

そこで私が、もしかして窒素・リン酸・カリなどの人工肥料が原因かもしれないな、と考えて、その原因となった窒素を希釈振盪したニタックや、リン酸のフォサック、カリウムのケーライカーブやケーライミュアといったレメディーを患者さんにとっていただいたんです。そうしたらどんどん良くなっていったんですよ。あ！　やはりこれだ！　と思いました。

ところがある人の場合はそれで多少改善するのですが、なかなか良くなりませんでした。それでおかしいなと思って、ＤＤＴのレメディーをとっていただいたんです。昔ＤＤＴという化学物質で作られた農薬が大きな問題になったんですが、このＤＤＴから作ったレメディーがさまざまな農薬の害に合います。これをとったところ、その患者さんも良くなっていったんです。

また今は枯凋剤（こちょうざい）といってジャガイモに使う枯葉剤のような農薬がありますが、そのレメディーもあります。

ということは、食べ物が原因の、「食源病」があるということです。それがわかったんです。

うちにはホメオパシーとらのこ会っていう会があって、患者さんやホメオパシーに興味がある方々が会員になっています。ですからその会員さんに無農薬の野菜を食べさせたかったんです。それから社員向けですね。社員たちが外で弁当を買ってきて食べると、その後でこっくりこっくり寝るんですよ。これでは仕事の効率が悪いでしょう？　それに何より社員の健康を考えて、じゃあ福利厚生でまず社員に無農薬のものを出そう、そして会員向けにも作ってもらおうと思って、農家に直談判に行ったんです。

ところが「農薬や化学肥料を使わないと作物は作れない」とかたくなに断られてしまったんです。ほかもいろいろあたったんですが、どこもダメでした。誰もやってくれなくて困って、「それじゃあ私が農業をやる」と言って、始めたのが八年前です。これが今やっている農業生産法人　日本豊受（とようけ）自然農株式会社です。

最初は群馬で始めたんですが、あまりうまくいかなくて、そちらは撤退し、今では、北海道・洞爺に一二一〇反と、静岡・函南に三〇反の農場があります。私たちは素人ですから、そんなに早くたくさん作れるというわけではなくて、最初は社員に出すだけで精一杯でした。やっとここ二年くらいで皆さんに提供できるまでになったんです。最近はインターネットでも日本豊受自然農のホームページ（http://toyouke.com/shop.html）から注文していただけるようになり、毎週クール便で自然農の野菜をお届けできるようになりました。

豊受自然農で育った
無農薬パツパツ野菜

その野菜は、曲がったものもあれば、ブツブツもあるし、小さいのも、虫が食ってるようなものもあるんですね。でも別にいいんじゃないかと思うんです。一番大事なのは、体に害を与えないようなものを食べることです。農薬たっぷりの野菜を食べれば食べるほど、肝臓はボロ

ボロになりますからね。

見た目には均一で、きれいでみずみずしく見える野菜は、遺伝子組み換えで作ったＦ１の種を使って、人工の農薬や化学肥料をいっぱい使ってできたものかもしれません。

人間も身長が一九〇センチの人があれば、一五三センチの人もいて、太っている人も痩せている人もいますよね。個々に形が違うというのは本当はいいことなんですよ。自然のまま作っていきますと、作物もそうなるんです。

でも、そうすると出荷するときに箱に入らない、なんてことになっちゃうわけでしょう？　本当は入れ物のために野菜を作っているわけじゃないのに。一番大事なのは、運搬とかそういうことよりも、人間の体に入ってそこに貢献するのかどうか、害にならないのかどうか、ということじゃないかと思いますけどね。つまり農業従事者は人間の心と体の健康を預かっている、大切な、尊い仕事なんです。

それからもう一つ大事なのは、地球をいじめないかどうかということです。地球環境は大事ですよね。ですから土をいじめない、空気をいじめない、環境をいじめないやり方をしないといけません。

豊受自然農で収穫されたキュウリを割って食べる由井先生

だけどうちのは小さかったり、虫が食っていたり、形が悪かったり、でこぼこだったりするので、けっこう敬遠されることもあります。でも、安全・安心な食べ物で、中身の味が濃くて、ぎゅっと栄養も気も詰まっているので、ぜひ食べていただきたい。食べましょう！　（テーブルに飾っていたキュウリを洗わずに、おもむろに食べはじめる。）

モグモグモグ……ほんとに濃いでしょう？　これが本来のキュウリの味ですよね。農薬が入ったえぐみがないでしょう？　農薬が入ると、しぶいというか、えぐいんですよ。

―モグモグモグ……そうですね。野菜本来の味がします。おいしいですね。

うまい。カッパだね、うふふふ。こうやってキュウリもって、頭にお皿つけて、カッパです（笑）。

―最近は個人で自然農などに取り組んでいる方もすごく増えてきましたよね。幸塾の関連団体であるグリーンオーナー・クラブでも、自然農の農家さんたちと協力して活動しており、農業を始める会員さんも多くなってきました。

すばらしいですよね。私も声を枯らして、この自然農を勧めてきました。八年かけてがんばりました。こういう自然農の作物や、種の話をしているときは、本当にみんな真剣でね。家の庭に花を植えているという人には、「まあ、花もいいけど、花は食べられ

ないから少しぐらいにして、あとは畝を作って農作物を作ったらいかがですか？」と言うんですよ。そうしたらみんな作り始めて、キュウリやトマトがなったと喜んで私に報告に来てくれます。

―先生の農業では、土壌改善などにホメオパシーを使ったりしているんですよね？

はい、ホメオパシーを使っています。これをホメオパシー農業と言っています。農業で大事なのは種と土です。種はＦ１のように遺伝子組み換えでおしべを取ったりして、一代しかできないものでは不自然ですよね。ですから本来のかたちの種を自家採取して、それを植えていくわけです。

それから畑の土ですね。まず土が味方してくれないことにはうまくできないでしょう？　ですから土壌菌や根粒菌といった菌の微生物を大事にしなくてはなりません。彼らがいることによって、ミネラルを分解してくれます。そうすれば作物がそのミネラルを根からふんだんに吸い上げることができるんです。ミネラルやビタミンがいっぱい入っているものは、微細な味わいがあるわけです。ですから食べると旨いんです。まろやかな、キュウリだったらキュウリらしい味になります。

形が均一でみずみずしくて立派に見えるけど辛味がない大根ってあるでしょう？　あれはＦ１の種でしょうね。そしてどういう作り方をしているかすぐわかります。

野菜そのものが持っている本来の味を大事にするためには、根粒菌や土壌菌に頼まないといけないのに、農薬をまいたら、そこにいる菌は死んでしまいます。土地を荒さない、菌を殺さないで仲良くするというのが一番大切なことです。ですから二〇一二年初めには「菌は金」と書き初めしました。

私たちには土壌菌を希釈振盪したレメディーがあります。ミネラルを促進するために、ミネ

ラルを希釈振盪したものもあります。土壌というのはうまく発酵しているものですから、その発酵を促進するために「アクティブプラント」という植物活性液も作りました。七五種類の野草、野菜、フルーツ、穀類、海藻などにレメディーをふんだんに入れ、三年間寝かせて乳酸菌発酵させています。そうやって植物たちがきれいに発酵したものを使うんです。

このアクティブプラントを一〇〇〇倍～五〇〇〇倍に希釈して土地にまいています。そうすると土壌が喜ぶし、作物そのものも喜ぶんです。根腐れ病のような腐敗の病気のときも、腐敗を止め、発酵を進めるアクティブプラントを使います。

それから発芽・生苗のときには、三日三晩アクティブプラントを薄めたものに漬けておきます。芽が出たら小さい鉢に植え、生苗したら外に植えるんですね。そうすると発芽率も高まるし、元気な子ができますから、最高にいいと思うんですよ。

慣行栽培ではお米の苗を農薬に漬けて作るところもあるそうです。ドラム缶いっぱいの農薬の中で米の苗を作るわけです。かわいそうに、お米にとっては出てくるときにさぞ痛かろうと思うんです。本当にお米の苗がかわいそうとしか言えないです。しかも苗ができたあとでそのドラム缶いっぱいの農薬を川に捨てたら、これは恐ろしいです。そんな環境破壊も起こっているわけです。これを早くやめていかないといけません。しかしこれも「農薬がなければ作物は作れない」という信念の病気があって、残念ながらなかなかやめることができないのです。

―自然農の中で注目されているバイオダイナミック農法というのがあって、由井先生も本を訳されたりしていますよね。由井先生のところではそれを応用されていらっしゃるんですか？

これは逆で、シュタイナーがバイオダイナミック農法にホメオパシーを導入してくれたんで

す。ハーネマンはシュタイナーの約一〇〇年前に生まれているんです。ハーブの分野は、ラデマッチャーという、やはりシュタイナーよりも一〇〇年ぐらい前に生まれた人が先にやっていました。シュタイナーはハーネマンのホメオパシーやラデマッチャーのハーブ療法を、植物や土壌づくりに使ったのです。これは画期的なことでした。つまりシュタイナーはそれらを発見したわけではなく、以前からあったさまざまなものを統合してくれたのです。

それはすばらしい運動だと思います。ただ、日本でもインドでも大本はもっともっと昔から、その同種の原理や薬草を農業で使っていたわけです。古くから民間では農業によもぎやわら、私たちの糞便や牛の糞便を使ったり、薬草を使うことはみんなが知っていたわけですね。

そのようにシュタイナーはホメオパシーやハーブ療法、天文学といった、古くからあったけれど失われてしまったものを、また再利用するようなかたちでダイナミック農法を作ってくれたんですね。オイリュトミーも五〇〇〇年前からインドにあった霊的ダンスを改良したものです。そのように忘れられた先人の知恵を再度使うことはすばらしいことだと思います。

植物の成長促進

2011.04.08
茎が伸びないまま開花

2011.05.06
茎が伸び、花つきもよくなる

2011.05.21
満開

© Dr. Taraka Yui & CHham

アクティブプラントをまいた畑では作物に著しい成長がみられた

私たちの場合は、日本豊受自然農として、日本古来の農業を手本に、ホメオパシー農業、そして一部バイオダイナミック農業の良いところを取り入れて、ホメオパシーのレメディーやハーブを使ってよりよいかたちにアレンジして行っています。

―なるほど、よくわかりました。ホメオパシーでの農業に対する取り組みというのは、今おっしゃった土壌の改良のほかにどんなものがあるのでしょうか？

あとは気の改良ですね。これがホメオパシーの一番得意としているところでしょうか。たとえば昔ここで家畜が死んだとか、人が自殺したというような所ですと、気がどーんと淀んでいるわけです。そういう霊魂をきれいにしていくようなレメディーもあって、それを散布したり、そのためのハーブを鋤（す）き込んでいったりするわけです。また浄化するため、水はけを良くするために、炭を入れます。

そして、植物が剪定されて痛そうに見えるときは切り傷に合うカレンデュラ、踏みつけられた植物には打撲に合うアーニカというレメディーを与えるなど、植物一つ一つに個別にレメディーを選択し、対応しています。そのようにいろいろな取り組みをしています。

放射能対策について

―先生は福島第一原発事故の放射能問題についてもさまざまな対策をとられていますね。震災直後、震災被害者支援の一つとして、放射能を希釈振盪したレメディーや、被曝の恐怖に打ち勝つレメディーを被災された方々に無料配布してくださっていました（由井先生の開発された放射能対策のレメディーは、現在でもホメオパシージャパンの通販で購入可能とのことです）。

そうですね。原因になったものを希釈振盪するというのは、私たち同種療法の基本原理ですから、プルトニウムを含む八種類の放射性物質と、福島第一原発から二キロメートル地点の土とほこりから、ＲＡフクシマ（※ＲＡ＝Radio Active(放射能)）というレメディーを作ったのです。なぜなら福島の人々は実際、その放射性物質を含むほこりを吸っているからです。いたるところで「気休めだ」などと言われ批判されてきました。しかし、実際私たちは有効であることを知っているので、別に何を言われてもかまわないと思っています。

植物に放射能を吸い上げさせないために、アクティブプラントの中にも放射性物質八種類を希釈振盪したレメディーが入っています。それをまくことによって、非常に良い結果を出せました。ですから私はこれを土壌にまきなさいと言うんですね。目に見えないからわからないじゃないかと言われますが、早いうちからこれをまいていた私たちの作物からは、放射能は検出されていません。

また実際に土壌中の放射能の影響でセシウムが四から五マイクロシーベルトあった福島の農

家では、これをまいて桃を作ったところ、その桃からは全く放射性物質が検出されませんでした。ところがまいていない所で作った桃からは検出されたのです。ですからホメオパシーがやはり有効であるということがよくわかります。

二〇一一年四月一日に被災地を訪問した際には福島第一原発から二〇キロメートル離れた所までしか近づけませんでしたが、その近くの川が福島第一原発の近くを流れることがわかりましたので、二〇〇Ｃまで希釈した放射性物質のレメディー、ＲＡを二リットルその川へ流し込みました。

また私たちＪＰＨＭＡは、三月一八日、四月一日、七月と三回、被災地の三県を訪れ、食べ物、水、レメディー、そして皆様からお寄せいただいた五〇〇万円以上の義援金を渡してきました。ホメオパシーでの災害・放射能対策や、人はどう生きるべきかについての無料講演もしてきました。

ホメオパシー・バッシングのこと

―次に、以前朝日新聞の報道をきっかけに起こった、いわゆるホメオパシー・バッシングというものについてお聞きしたいと思います。私もそのときにホメオパシーについていろいろ知っていましたので、何かおかしいという気がしました。そのあと先生の『毒と私』（幻冬舎）という本も読ませていただいて、詳細を知りました。詳しく知れば知るほど、ホメオパシーを怖いもの、怪しいものだと思わせようという意図がメディアにあるようにしか思えなくなりました。

橋本さんのようにみなさんが理解してくれますと、すごくありがたいんですけどね。まあ、自己治癒力を触発するものがあんまり広がりますと、みんな長生きになるし、元気になるじゃないですか。そうなると困るところもありますから。そういう方々が、新聞社のスポンサーになったということもあるのかな、と思うわけです。新聞社もそれで食べているわけですから、スポンサーが求めることをやってあげなくてはいけないわけです。

ただ一番の問題は、メディアが改ざんをしてはいけません。嘘をついてはいけません。その点で「ホメオパシーで人が死んだ」というような書き方をした朝日新聞の記事は、本当に良くないことだったと思います。

まあ天下の朝日がそういう嘘を書いてまで、ホメオパシーを悪者にしたかった理由というのも、わからなくはないです。このままホメオパシーが広がって、国民から支持を受けてしまう

と、クスリや予防接種のワクチンなどがあまり使われなくなってしまい、そうするとどこかが儲からなくなりますからね。ですからそういう利権との関係も考えていたでしょうし、もっと大きな、国レベルで今ホメオパシーを広げていいのかと思ったのかもしれません。

しかし日本の国民が、ヨーロッパやインドや米国のように、自己治癒力を触発して自らが健康になる、体にやさしいホメオパシーを必要としてくれたら、いつかは国もメディアも変わらずにはいられないでしょう。

とはいえ、メディアでホメオパシーを規制しても、国民は馬鹿じゃないので、世界で広がっているものを知らないわけはないんです。皆さん海外に行きますからね。そうしたら、ホメオパシーで人が死んだなんていうけど、希釈振盪した砂糖玉をとって死ぬわけがないということは誰でもわかるわけですよ、砂糖玉を大きな袋に入れて頭をボコッとなぐったら死ぬかもしれませんけどね（笑）。

でもその中で一部の方々がインターネットで「こいつらはカルトだ、怪しいんだ」というふうに煽りましたよね。「物質がないものが効くなんてなにごとか」とかね。

もう一つ言われたことは、自分たちの自己治癒力を触発するので、結局ぎりぎりまでそれに頼って病院に行かない、それによって医療ネグレクトになったんじゃないかということでした。でも医療ネグレクトなんて私たちはまったくしていません。「病院に行くな」なんて言ってもいません。

だからそういうことを言われないためにも、今はＣＨｈｏｍのビルの地下で、高野医師に池尻クリニックという病院を開いてもらい、現代医療の分野から診断をしていただいています。そうやってお医者さんにみてもらうこともできるようなシステムにもなりましたから、もう医療ネグレクトと言われる理由は何もないでしょう？

まあそんなふうに、バッシングがあったおかげで、進んだこともいっぱいありました。国や

行政からのホメオパシーに対する間接的な指示もありましたし、前よりやりやすくなりました。

ただもちろんこれからは、ホメオパシーを利用する人たちが、自己治癒力だけで頑張ってしまい、手遅れになるようなことがないようにしていかなくてはなりません。やはりここ日本では現代医学というのが国が認めた第一医学ですから、そこをないがしろにしてはいけないのです。

ですから私たちも現代医学と手に手を取ってやっています。検査しないと、私たちにはわからないこともいろいろあります。そうして病気の診断をしてくださるのはとてもすばらしいことだと思います。ですから敵対関係を作るのではなく、現代医学の得意とする診断と検査をしていただき、その結果どの選択をするかは患者さんが決められるようなシステムになればいいと思います。

何から何までクスリを飲んだり、手術だけで治るわけではないのです。もうちょっと待ってもらえば自己治癒力が働くということもあると思います。お医者さんもその判断ができるようになれればいいなと思います。また無駄にクスリを使わなくてもお医者さんがそれなりに儲かっていけるように、国がお医者さんの給料を払うといったシステムがあればいいと思います。そうすれば三〇兆円を超える日本の膨大な医療費は減っていくのではないでしょうか。

ですから患者さんたちは、心配なときは自分で、ホメオパスだけではなくて、お医者さんの意見も聞いてみればいいと思います。そのようにして選択したらいいんです。そのうえでホメオパシーだけでなく、マッサージや鍼灸、アロマがいいと思えばそれを選択すればいいですし、それでやはり現代医学がいいと思ったらそれを選択すればいいんです。自分の責任において、自分でどれを選んでいくのか決めればいいんです。また自分で決めるためには、各療法を知り、病気を知ることも必要です。うちに来る方は、現代医学もやりながらホメオパシーをやってい

る方もいれば、鍼灸をやりながらホメオパシーをやっている方もいます。皆さん、さまざまなことをされながら健康になろうとしています。すばらしいと思います。

バッシングについては、結局、たたきたかったからたたいたんでしょ、っていうのがオチなんですけども、詳しくは幻冬舎から出版されている『毒と私』という本を読んでいただければわかります。ぜひみなさん読んでいただければと思います。

―このバッシングのきっかけになった乳児の死亡ケースでは、ホメオパシーの投与が直接的な原因で亡くなったとは考えられていませんでしたよね。

代替療法をされている方が、ほかの療法を拒絶した結果、不幸にも問題が起きてしまったということがあった場合に、それを「その代替療法が悪かったからだ」というのは理論のすり替えのように思わざるをえません。

この件につきましては、一度自分で詳しく調べてみると、報道が何かおかしいということを考えるきっかけにもなるように思います。

ぜひ皆さんにも『毒と私』を読んでいただき、何が真実なのか、自分で考えていただければと思います。

ただバッシングのおかげで、私たちも今までより体制をしっかり整えることができました。それからバッシングが結果的に「ホメオパシーをこの日本でやるにはどうしたらいいか」という指標を示してくれました。朝日新聞さんが騒いでくれたおかげでそれが決まったという点で

は、すごくありがたかったです。だからこれも塞翁が馬かな、と感謝しています。

―ちょうどその頃、「子宮頸癌ワクチンを打ちましょう」という宣伝があちこちでされて、それに対して「子宮頸癌ワクチンは危険だ」という声が広まりはじめていましたよね。何かそれと関係があるのでしょうか。

私はワクチンに対して真っ向から疑問視するような研究発表をしていますからね。何度も言いますが、「ひょっとすると、予防接種は自閉症に限らずさまざまな病気を作っているのではないだろうか」という一つの仮説について、二〇年間実験して症例を積み重ね、その結果を発表してきました。

予防接種を打たなくて病気にならないとしたら、それはある人たちにとって都合が悪いのかもしれません。農薬にしても、使って病気にならないと困る人もいるかもしれませんからね。

子宮頸癌のワクチンについては、まだ一四、一五歳くらいの、ちょうど卵子が成長しているときに、わざわざ子宮頸癌を植えつける必要がどこにあるのか？　と思うんですよ。結局その副反応（※予防接種では副作用と言わず副反応と言います）で亡くなったり、具合が悪くなったお子さんがたくさんいます。そんな副反応があった子どもたちのことを、マスコミはあまり大きく取り上げませんよね。でもそれはぜひ取り上げなければならないと思うんです。

またこの中には動物たちが避妊するために使われるスクワランが入っています。それによって将来子どもを産めなくなる可能性は否定できません。

そうやってスクワランがいっぱい入った子宮頸癌ワクチンを、みんなが打ってしまって、将来日本人の子どもができないというふうになるかもしれません。それは日本人減らしにはいい

かもしれませんが、そういう危険性があることがわかったのなら、気づいた人間が、それを食い止めなければならないでしょう？

それにはまず、お母さんがたが賢くなって！　「子宮頸癌なんて怖くないんだ」と知っていただきたいのです。

子宮内に異物が溜まらなければ、子宮頸癌にはならないんです。実はガンだって一生懸命体を守ろうとしてできたものです。ですからカンジダができる（カビがはびこりやすい）ような体にしないこと、体を冷やさないことが一番大事なんですよ。抗炎症剤（解熱剤、風邪薬など）をいっぱいとって、低体温になると体にカビがいっぱい生えるんです。そのカビから体を守るためにガンができてくれているわけですから、ガンは実はありがたいんです。

そしてクスリで炎症や熱を止めて老廃物を溜めたことが一番の問題だということに気づいていただきたいのです。心にも体にもですよ。だから、汗も流し、うんちも、おしっこも、出るものはしっかり出すんですよ。吹き出物もかまわない、熱が出てもかまわない、出るものをありがたいと思うようにならなきゃいけません。汗止めを使うなんていうのもおかしいと思います。くさい汗が出るのは、いっぱい老廃物が出ているからなんですよ。心もそうです。感情を溜めないで、怒っているときはバリバリ怒って、泣くときはボロボロ涙を流しましょう。

本物情報の見極めと対応をどうするか？

―最近では原発事故によって原発利権のことが明るみになり、マスコミの言うことがおかしい、と思うようになった人も多いですよね。ただその原発についても、放射能の害があるかないかで意見が分かれたりしています。幸塾でも本物だと思う情報を紹介する活動をしていますが、その中でもさまざまな情報があります。

その情報が本物かどうかを自分でどうやって見分ければいいのか、またそれを知ってどう行動すればいいのかについては、誰もが迷うところだと思います。そのあたりのことを先生はどう思われますか？

まず、多くの人間が犠牲になって、一部のごく少数の人間がぼろ儲けしているなんてことはあってはならないと思います。そのようなことを食い止めるためには、みんなが賢くならなきゃいけないわけです。

原発は私たちが知らない間に、五四基もできていたわけです。でも、知らないではすまされなかった。結局私たち自身が疎かったわけです。それで原発賛成の議員さんに一票を入れてしまったんです。この責任は自分たちにあると思います。また原発はそれほど害はないと洗脳されたことも一因でしょうか。

原発は今になって大きな問題になっています。それは日本人が目覚めるためには、とても大

事なことだと思います。実際五四基が全部止まっていても、電気は使えましたよね。ということは「それがないと電気が足りない」という原発推進派の人たちの言っていることは嘘だったわけです。ところがみんなが嘘だ！　と騒いでいるのに、もう一回原発を動かそうとして、そして大飯原発が再稼働しました。

そのようなことを、ずっとやっていても埒が明かないわけです。私たちが今一番しなくてはならないことは、無駄な電気を使わないこと。早く寝て、早く起きたらいいんですよ。太陽とともに寝て、太陽とともに起きれば無駄な電気は使わないでしょう？　それはすごく大事なことだと思います。これを一番先にしたらいいんじゃないでしょうか？

それから原発にしろ、予防接種にしろ何にしろ、今、こういうものがはびこるということは、ある意味で言えば、神様がＯＫを出しているからそうなっているわけです。反面教師として彼らがいてくれるわけです。こういう悪い役をやってくれている彼らに、私たちは感謝しなくてはいけないですよ。だって彼らによって、今までわからなかったことにいろいろ気づくでしょう？　ですから、一概に予防接種が悪いとか、原発が悪いというような短絡的な見方をするのではなくて、もう少し広い目で見ていきたいですよね。

そしてまた、はびこったということは、私たちが求めたからなんですよ。予防接種が広まったのは、そもそも「子どもの病気が怖いから助けてくれ」と言って、自己治癒力を信じなかったからです。原発問題は、みんなが「もっともっと電気を」と求めたんです。だから今のように広がったんです。広がるチャンスを与えたのは私たちなわけですよ。

もっと私たちが賢ければ、自然型のエネルギーで良かったわけだけれども、それも「CO_2が出ないからいいよね」なんてプロパガンダをやられて、それを信じてしまったわけです。そこでしっかり調べるということも大事だったわけですよね。ですからこういう問題は、ある意味、今起こるべくして起こっているわけです。みんなが賢くなるために起こっているんですよ。

それなのに、すごい憎しみを持って原発反対運動をしたりしてはいけないと思うのです。ものすごい憎しみを持って予防接種反対運動をしたり、朝日新聞に食ってかかってもいけないと思います。そういうことをすると自分が病気になってしまいます。

そうではなくて、もっと発展的にものを考えたらいいと思うのです。では自分はどうするか？と考えて、実行しましょうよ。電気を消しましょうよ。だからうちの会社は自然型エネルギーでやっていこうとしています。

もちろん私も理想では原発は全部止めるべきだと思いますし、そうしたいですよ。でも私はプラカードを持っていません。デモには行かないわけです。「デモで訴えないと向こうに伝わらないでしょう？」と言われたら確かにそのとおりです。多くの方がそれをやってくれていることは、とてもありがたいと思っています。

でもお願いですから、憎しみをもたないようにしてください。それをやると自分に返ってくるんです。ある方が原発反対運動をやっていて、まだ若いのに、とうとう動けなくなってしまいました。彼女の中にあった問題は「不条理である」ということでした。確かに原発も予防接種も不条理なわけです。弱いものが犠牲になるというのは不条理で、理不尽です。でもそれをずっと思って戦っていたら、自分に返ってきて、自分を刺すような痛みが出てきたのです。

ですから彼女には不条理のレメディーを出しました。そして「原発反対運動にはもう行かないほうがいい」と言ったんです。そして「あなたが行けば、むかっ腹が立つでしょう？　なんで多くの人間が犠牲になり、一部の人間が利益を得ているんだ、と思うと悔しさが出てくるでしょう？　本当に環境を良くしたい、本当にこの問題を良くしたいと思って、喜びを持ってデモをやるなら行っていいですよ」と話しました。そうしたら怒りの感情を乗り越えてどんどん良くなっていきました。

私は、一つのところを見て「何だおまえら、農薬使って！」とか、「予防接種なんかやって！」とか、「原発なんかやって！」とは言いたくありません。起こっていることに対して、自分から実行していけばいいんです。自分の中に、原因も結果も、それから解決法もすべてあるんですから、まず、自分を変えていけばいいじゃないですか？　欲を張って多くを求めすぎていないか？　便利さばかりを求めて自然を害していないか？　自分に問いかけましょう。みんながそうやっていけば、その心の反映として社会は変わっていきます。

―私も原発はないほうがいいと思うんですが、反対運動に関しては、理解できる半面、一方的に相手を責めることに対しては、何かどこか違うんじゃないかなという思いがあるんです。

反対することはすごく大事ですけど、そこに自分の怒りの感情を乗せないようにするのが、とても大事だと思うんですね。確かに世の中のことを知ると、一部が儲かって、一部が本当に苦しんでいるということがよくわかります。でもそこで苦しんでいる人たちを見ると、事なかれ主義だったということも確かなんです。ですから、もっと調べましょうよ、本当かどうか、体験から学んでいきましょうよ。

病気も原発も恐怖がつきまといますが、一人一人がこれらの恐怖を乗り越えていかなければなりません。世界では二〇〇〇回以上も核実験が行われていて、そのうち一〇〇〇回以上は米国ですが、すでに世界中が放射能汚染にみまわれています。入ったものを自己治癒力を使って排泄することが、最も大事なことです。次に人間を含めた自然を破壊する、人工の物質を作らない、作らせないことがとても大事なことです。

―なるほど、先生のお話で、自分の中の疑問が一つ解けた気持ちです。ありがとうございます。

インナーチャイルド

―先生の対応されているケースなどをＤＶＤで見ていますと、大人の場合、子どものときの経験が原因になって病気になったというような話がとても多かったと思います。私も魂と心と体が繋がっているというのは、いろいろなところから聞いていて、自分でも過去の経験などを思い出してクリーニングするということを続けているうちに、どんどん体調が良くなって元気になってきた経験があります。ですから自分の中のインナーチャイルドを癒すというのはとても大切なことだと実感しています。先生にぜひこの、ホメオパシーにおけるインナーチャイルドの癒しについてお聞きしたいと思います。

インナーチャイルドの癒しというのは、私がイギリスでホメオパシーに出会って、学校に行き始めてすぐに、「これをやらないと、えらいことになるぞ」と思ったんですね。

今から二五～三〇年くらい前、私には山ほどのインナーチャイルドがありました。ですから非常に苦しかったわけです。その頃の私は、自分を責める傾向がすごくあったんですね。私が感じていたことは「自分というのは罪深い人間だ」、「自分はダメな人間だ」ということでした。非常に自己否定が強かったんです。

それで「この感情はどこから来るんだろう?」と自分に問いかけたわけですよ。「とらちゃん、

なんでそんなに自分をいじめるの？　なんでそんなに自分はダメだって思うの？」とね。そうしたら、小さい頃の私が言うんです。「だってうちの母ちゃんが、おまえなんか死んだ方がよかったんだ、おまえは何の役にも立たないんだって、何度も何度も言うんだよ」と。子どもが泣きながら言ってきたのが、心の中から聞こえたんです。

それで私はそれがどういう場面だったかを思い出しました。すっかり忘れていたんですけど、私の母親が五人の男にレイプされてしまったことがあったんです。それで母親が私に「警察呼べ！　寅子、呼べ！」と言ったのですが、私は怖くて耳を塞いでしまったんです。ですから私は母親を助けられなくて申し訳なかったと思って、謝りたかったんですよ。それで次の朝、おずおずと近づいて「母ちゃん」って言おうとしたら、何事もなかったように母親が、「昨日は何もなかったんだ、いいか、何も言わんでいい」と言ったんです。それで謝るチャンスを失ってしまったわけです。それが六歳か七歳のときでした。

それから一〇歳になったときに、今度は家にどろぼうが入って母親が刺されてしまったわけです。運良く母親は浅い傷で済んだんですけど、そのときも私は自分だけ隠れてしまって、何もできなかったんです。それで私は、自分に勇気がなかったから母親を助けられなかったと思ってしまったんですね。そして「自分は役に立たない人間なんだ」ということを自分自身に徹底的に言ってしまったわけです。だから役に立たない場面になると、自分はクズなんだ、ダメなんだといって、すごく自分を責めてしまうんだということがわかったんです。

でもその子どもたちに向かって、「しょうがないんだよ、とらちゃん。とらちゃんは六歳じゃないか、一〇歳じゃないか。できるわけないだろう」と大人のとらちゃんが言ってあげたわけです。そうしたらもう、号泣でしたね。涙が止まりませんでした。そのときはイメージ療法で、その泣いている子どもの自分をだっこしたんです。それで「仕方がなかったんだよ、ちっちゃ

かったから。勇気がないわけじゃないんだよ」と言ってあげたんです。
そういう作業をどんどんやっていったら、この小さい子たちがどんどん癒えていきました。そうして「自分はクズではないし、価値がない人間ではない」とだんだん思えるようになっていったんです。

ところが、そう思えるようになったら、何だかもう母親に腹が立ってしょうがなくなったんですね。何でこの人は「おまえはいらん子なんだぞ」なんて言ってたんだ！　と思って、日本に戻ってきて「私は本当にいらん子だったんかい」って言ったら、「それはおまえ、妊娠して三か月のときにお前のお父さんが死んじゃったろう。上に六歳と三歳がいて、また一人生まれても食い扶持が増えるだろう。だからおまえはいらん子でね、いないほうがいいと思ったから、たたいたりしておろそうとしたんだけど、おりなかったんだよ」って、まるでおりなかったことが悪いことのように言われたから、腹が立っちゃってね。
「でも私はいる子だよね？　母ちゃん、私はいるよね？」って、もう三六、七歳だったのに、子どものように聞いたんですよ。ところがこの親が絶対にうんと言わないんですよ。それで取っ組み合いのけんかになったんです。その後で母親が「うどんでも食べよう」と言って、台所に行ってうどんを作り始めたんです。そうしたら背中を向けて鼻水をシュルシュルやっているから「母ちゃん、泣いてんの？」と聞いたら、「泣いちょるわけない、今、ネギ切っとるんだ」と言うわけですよ。
母親はシングルマザーで、気丈な人だったんですね。レイプもされ、刺されながら、一人でがんばって兄と私を育てて、八八歳まで生きて、本当にもう、大変な人生で可哀想でしたよ。私もそういう母親のもとで育って、インナーチャイルドでもう身も心もボロボロになりましてね。苦しかったんです。それで解決策を求めたんです。当時はそういうものを探すのが大変でしたけど、いろいろな本などを探していたら、外国の本があって、インナーチャイルドを癒す

ことを知ったんです。

ですから私はホメオパシーでも二五年〜三〇年前から、このインナーチャイルドの癒しをやっているんです。だからインナーチャイルドはどういうものかわかっているんです。

体を蝕むのは、結局、自分ができなかったことを責め立てて、自分をクズだと言っていじめるからなんです。それは、自分の苦しかったこと、悲しかったこと、辛かったこと、怖かったことを、わかってくれる親も親戚も、先生も誰もいなくて、黙って飲み込んでしまったからなんです。

ですからこのインナーチャイルドたちに目をかけてあげてください。インナーチャイルドは暴れますよ。「もう嫌だ！」とか「あいつをぶっ殺してやりたい」とか言いますよ。そうしたら、「そうだよね、殺したいくらい腹立ったよね」という一言を言ってあげなきゃいけないんです。もちろん本当に相手を殺すのは絶対にいけませんが、自分のその感情を認めてあげることが大切なんです。

これがイメージ療法です。私のホメオパスとしての経験からみて、多くのうつ病や統合失調症といった精神疾患の患者さんも、インナーチャイルドが原因だと思います。

あの頃は苦しかったなあ。でも乗り越えてきました。今は本当に幸せです。二〇年やりましたよ。時間がかかりましたね。まあ修行ですね、これも。

ー『毒と私』の中に、先生とお母様のエピソードがありますよね。私はそれを読むたびに泣いてしまうんですよ。

私も今でも泣いてしまいそうになりますよ。でも、正直であるということは大事だと思うんです。ですから私は自分が体験したことをこうやって書くわけです。『インナーチャイルドが叫んでる！』（ホメオパシー出版）という本にも私の体験を書きました。誰かが同じような体験をして、自分を責めているときにこれを読んで、「ああ、この人も同じだったんだ」と思ってくれたらめっけものかな、と思って、恥をしのんで出しているんですね。自分の体験を包み隠さず出すというのはけっこう勇気がいるんですけど、でも本当は隠すことなんかないんですよ。私たち人類っていうのは、同士同胞で、みんなそれなりに苦しんでいるわけです。ですからこれは共有したほうがいいかなと思って書いたんです。

―私も三人兄弟の末っ子なんですけど、私がお腹にできたとき、母親が最初は産みたくないと思ったらしいんですね。それでおろそうと思って病院に行ったら、おろすのが怖くなってしまい、やはり産もうと決めたということを聞きました。

私と同じですね。それをお母さんから聞いたのね、ショックでしたね。

―ですから多分心の中に「自分は生まれてきてよかったのかな」という思いがずっとあったんだろうと思うんです。

そうですよね。そういうときには、「自分はとても大切な人間である」「大事な人間である」と、今のあなたが、あなたに言ってあげることです。これがすごく大事なんですよ。

―……（涙を流して）はい……。

そうなんです。多くの人がみんなそうやって苦しんでいるの。私だって本当につらかったんですよ。いらん子って言われると、そのたびにものすごくつらかったです。だから一言、親が「おまえは、いらん子じゃない、大事な子だったよ」って言葉を言ってくれれば、きれいに精算するのに、私の場合は最後の最後まで言ってもらえませんでした。

でもそれなら自分でそういうふうに思えばいいんですよ。自分で卑下する必要はないですよ。このつらい人生で多くのことを教えてもらったと思えばいいの。

―そうですね、はい。だからみんなが、その生き方でいいんだって自分で思えたらいいと思って（涙）……。

そうですよ！　このままでいいんですよ！　みんながこうあるべきという道徳から解放されて、自分自身を堂々と生きてもらいたいのです。

女性性の時代へ向けて

―私は母親でもあり、起業家として個人で事務所を立ち上げておりますし、以前は会社を共同経営した経験もあります。働く母親、起業家として大先輩でもある先生を見ておりますと、本当に先生の実行力はすばらしくて、尊敬するばかりです。どうやったら先生のようになれるのか、その秘訣をぜひお伺いしたいと思います。

私にはこれまでいろいろなことがありましたからね。ホメオパシーに対する偏見はもちろん、女性に対する偏見もありました。予防接種にケチをつけて嫌われ、自然農をやって農家さんたちから嫌われたりもしました。ですからけっこう嫌われることばかりやっているんです。でも私は、嫌われることが苦じゃないんです。小さい頃からずっと嫌われてきましたから。親にも嫌われたし、本音を言うから先生にもよく嫌われて、たたかれました。昔の職場でもけっこう嫌われましたよ。そのおかげで、みんな何か用事があって嫌うんだろう、と思えるようになりました。

私が大事にしたいのは、こうすれば理想的な社会になる、という理想像ですね。まずそれを掲げて、自分がそのために何をやりたいか、どうしたら理想に近づくか考えて、それに向かって実行していくわけです。

そしてそこで人に頼らないことです。自分の思う理想像は自分しか描けません。だったら人

に頼ろうとしても、ほかの人にはできないでしょう？　「まず自分でやってみること」。これが私のモットーの一つですね。

ものごとは、うまくいくときと、うまくいかないときがあります。たとえ何かをやった結果うまくいかなくても、自分が一生懸命努力したことは、本当にかけがえないことですよね。ですから私は、結果のためにやっているのではないんです。それは「本当に自分にやれるのか？」という、自分に対する挑戦ですね。

つまりプロセスのほうがすごく大事だということです。結果は後からついてくると思っています。プロセスをエンジョイできないと面白くないし、うまくいきません。逆にプロセスをエンジョイしながらやれば、やはりいいものができますよ。

昔は私も気が短くて、プロセスをエンジョイできなかったんですね。高校生のとき、すごく好きな男の子がいて、マフラーを編んで渡そうと思ったんです。一晩徹夜して編みましたよ。そういう性格だったんですね。その人のことを思い浮かべて毎日毎日一段ずつ編む、というプロセスを楽しめばいいのに、当時はできなかったんです。すぐ結果が欲しいものだから、目の下にクマ作って、ダダーッと一気に編んだんです。

次の朝、その人を待ち伏せして「これ作ったんだけど」と言って渡したんです。そうしたら「なんだ寅子、目の下にクマ作って」と聞かれたので、「寝ないで作ったんだ」と話したら、「えーっ？」って、逆に引かれちゃってね。「俺、友だちだと思ってるけど、そんな気はないし。寝ないでもやるなんて！」なんて驚かれてしまったんです。そして「そこまでの気持ちだったら、俺はもらえねえな」なんて言われてしまって、ものすごくショックでした。

つまりそれは私にとって、この人が私を好きかどうか？　という、結果が知りたかったということだったんですよね。でもそれがこのときすぐにわかっちゃったわけですよ。本当は相手

が自分を好きかな？　嫌いかな？　なんて思っているうちが花なんですよね。好き嫌いを聞いたときには、もうそれで一つ終わっちゃうわけです。

そんなふうに、私には「忍耐がない」という心のクセがあることがわかりました。その私が忍耐力を身につけるには、結果を求めてはいけないなと思ったんですね。

忍耐がないのは本当に信頼をもって愛されたことがない証拠でもあります。でも誰もが心のクセ、弱点を知ったら、それはすごくいいほうに転換できるということです。私はいつもそうやって考えています。

それから、女性起業家が男みたいになって、髪振り乱してやるのは嫌ですね。男にない可愛さがないといけないと思うんです。だから美しくなる努力を欠かしたくないですね。仕事を男よりしていても、美しくなる努力をするというのが素敵だと思うんです。

可愛くするというのは女の特権じゃないですか。赤い服を着たり、ネックレスを着けたりするのがすばらしいんです。ですからその特権をないがしろにして、男になって、鬼のように働くような女社長にはなりたくないなと思うんです。

それと困っている人がいれば助けてあげたいという気持ちですね。私自身、充分困った経験がありました。困り果てて、こんな人生はもうつらくて嫌だと思ったときに、その折々に人に助けてもらったことがありました。それがすごくありがたかったんです。だから私も助けてあげられるような人間になりたいと思ったんですね。

ですから「この人が敵だろうが味方だろうが、困っているのは事実でしょ、助けないと」と考えているんです。そんなふうに、狭い目線で見ないで広い視野で見ていくこと。これも私のモットーの一つですね。

私は子どもには子ども目線で話すからか、けっこう子どもに好かれるんですよ。「先生」じゃなく「とらちゃーん」とか言われて、子どもとすごく仲がいいんですね。私は誰かが体験したことに共感する気持ちがすごく強いから、子どもも友達みたいに思ってくれるようです。自分がつらい思いをしたせいもあるんですけど、何よりも相手をわかってあげたいという気持ちが強いんですね。そこで大事なのはまず相手を受け入れることだと思っています。

実は今朝も娘にずっと怒られていたんです。海外の学校に通っている娘が、休暇で今日本に帰って来ているんですが、昨日私が仕事で夜中の一二時近くに帰宅したら、今朝カンカンに怒ってね。「お母さん、早く帰ってくるって言ったよね？　私、待ってたのよ！」と言うんですよ。「えっ？　そんなこと言った？　『帰る』とは言ったけど、『早く』って言ったっけ？」と聞いたら「言ったんだよ！　だから待ってたんだよ！」と言われてね。

「ごめんね、お母さん『早く帰ってくるね』って言ったんだね。『帰るよ』って言えば良かったね。早く帰れない事情があってごめんね」と言ったら、「だったら電話すればいいでしょ？　お母さん、それは人を傷つけるよ！」って言われたから、「そうだね。ごめん。おまえの言うとおりだね」と謝ったんです。怒られても何しても全部受け止めることですね。そして自分が悪かったら、大人であっても子どもに謝れる勇気を持たないといけないですね。

そうやってまず、相手の言い分を受け入れるところに、愛があると思うんです。予防接種も原発も一概に反対するばかりじゃなくて、受け入れて、愛するということですね。といってもただ相手に従うのではなくて、相手の言い分を理解しながらも、自分で考えて、自分が体験した結果を言うことがすごく大事かなと思います。

―これからは女性性の時代と言われますけど、先生の生き方にそのヒントがあるような気がし

ますね。

でも、私、ハッキリ申し上げますけど、男性にはもてないですよ！（笑）　女性にはけっこうもてるんですけどね。一対一の恋愛になると、もっと弱くて、頼りない女性がもてますよ。私みたいに「何でも自分でやれるんだ、ドスコイ！」なんてやっていたら、絶対にもてないと思いますよ（笑）。

でも、私も来年は還暦ですからね、私にとって一対一の恋愛の時代はもう終わったと思っているから、別にいいんです。

これからは一対多でありたいですね。植物にも、動物にも、虫にも、環境にも、牛にも、人間にも、子どもにも、みんなに本来の姿を生きてもらいたいんです。そういうことを自分はやっていきたいと思っているんです。

―幸塾の最高顧問である船井幸雄先生などが「愛と感謝と包み込みが大事」とおっしゃっていますが、由井先生はまさにそれを実践されていらっしゃるなあ、と思います。

さすが船井幸雄先生はいいことをおっしゃいますね。大下伸悦先生や川田薫先生、飯島秀行先生もすばらしいです。

私は時々社員に厳しいことをいいますから、包み込みは社員にはないかもしれません（笑）。感謝も最近やっとできるようになりましたね。「自分は生かされているんだ」ということが腹の底からわかったときに、感謝がにじみ出ました。本当につらい人生だと、最初は不平不満が多くて、感謝がなくなることも多いですからね。私もそういう時代がありました。けれどよく振り返って長い目で見てみたら、本当にいろいろな場面で、私は神様から助けてもらっている、

いろいろな人から助けてもらっていると思えて、やっとありがたいと思えるようになりました。

私自身も発展途上、皆さんも発展途上です。でもそれでいいんじゃないかな、と思いますよ。できないときはできないときで、自分を責めないようにしてください。発展途上なんですから完璧にはできないですよ。

川田薫先生も魂のお話をされていますが、私も、人間は神に近づくまでこの人生で魂を磨いていくものだと思っています。何回も何回も生まれ変わって、まるまる・つるつるの神になれるよう磨いていきましょう。

これからの時代に大切なこと

―船井幸雄先生は予想が一〇〇％当たると言われていますが、私はその船井先生の「資本主義はもうこれからつぶれますよ。その前に時代の変わり目の大激変がありますよ」というお話を聞いて、「これからどんな時代になるんだろう？　自分に何ができるんだろう？」といろいろ考えました。そのときに自分なりに思ったのは、ものやお金も大事だけれど、それだけではなくて、人と人とのつながりや絆が、これからの世の中で生きていくうえで大事になってくるんだろうな、ということでした。

そのときに『病父を訪ねて三百里　―豊後国の二孝女物語―』という江戸時代の実話に出合い、今は忘れられている江戸時代の人情や親子の絆を現代人が思い出すきかっけになればと思って、現代語訳を新日本文芸協会より出版しました。

由井先生ご自身は「これからの時代がこうなっていったらいいな。そのためにこうしていきたいな」といったこれからの時代に対する考えや目標のようなものはございますか？

私もその本を読ませていただきました。すばらしい本ですね。娘さんたちが父親と会えて本当に良かったと思います。

資本主義、お金の価値というものがなくなってきたら、人間が健全になるところは健全になるでしょう。私もそのことを以前から考えていました。

もし資本主義がつぶれて、物々交換になりますと、種と土が大事になりますよね。ただ物々交換では、ものの価値がちょっと変わってきますよね。皆さんの求めるものが価値があるわけですから、芋の価値と桃の価値が、芋一〇個で桃一個の価値になったりするかもしれません。そのへんがすごく難しいわけです。

ですから、今の貨幣がなくなっても、流通の中でそれに変わるものがあったほうがいいだろうと思います。そうするとこれからもある程度はお金は必要かなと思っています。ただ問題は今、一部の資本主義の申し子たちが、たくさんのお金を手段を選ばず独占していることにあるわけですね。

これまでの歴史を振り返って、百姓一揆やストライキ、革命などの運動がどこから起こるかをみると、労働者階級の知的層が起こしているんですね。労働者として苦しい毎日を過ごし、あるときに「これは、おかしい」と思って問題提起をするわけです。まずそういう人たちが立ち上がることで、世の中が変化していきます。今まさにそういうことが起きようとしているのです。

ところがそれは資本主義の支配階級にとってみると、やはり都合が悪いわけです。ですからこの層の人たちは徹底的にやられるわけですね。今の私なんかがまさにそうだと思います。労働者階級は頭を使わないと餌食になってしまうのです。ですからこんな時代には、常に情報を

ゲットし、情報の発信元が正しいかを知り、自分の中に落として咀嚼し、自分はどう行動するかというのを決めていかねばならないですね。

でも何が一番大事かといったら、根本的にはどうしても愛なんですよ。その愛はやはり女性が先に発信していかないといけないでしょうね。女性は子どものためにおっぱいを飲ませたりしますし、より良い生活水準にしたいとか、どうしても子どものために考えますから、そこで母性が育まれるわけです。この母性という愛がなければ、先には進んでいかないと思うんです。

女性が幸せで、母性をふんだんに持って、包み込むようにしていけば、社会は安泰になると思います。これからはその女性性が大切になっていくと思いますので、自分を癒し、認めてあげて、多くの女性に母性に目覚めていただきたいですね。

震災のあった昨年募った、一年を表わす漢字は「絆」という字になりましたけど、絆の中には切っても切れない、捨てていきたくても捨てていけない親子の絆もあって、やはりつらいところもあると思うんですね。ですから私は、糸が半分になるんじゃなくて、糸が吉となる「結」がいいと思うんですよ。ゆい、むすびですね。これからは結びが大事だと思うんですね。

つまり、血のつながった親子や親戚の絆だけではなくて、人類が手に手を取り合って結び合おうよ、ということですね。人類そのものが家族。だからみんなで手を結んでいこうよ、ということですね。それが私の理想です。これからそういうことをしていきたいですね。自分の名前も由井（ゆい）だからいいかな、と思ったりしてね（笑）。

うちの社員一〇〇名も、私が自然農で作った食べ物を食べています。豊受自然農の農園でも、私が行くたびにそこで働いている人たちに食事を作ります。八人、九人分を一人で一気に作りますから、けっこう大変なんですけど、そこに喜びがあるわけです。

どの子も我が息子であり、我が娘であるという感覚が私の中にはあるんですね。私自身が家の絆が薄かったから、そのおかげで「みんなで一緒に同じ釜の飯を食べよう」という気持ちを持てたのかもしれませんね。

ですから被災地にもおにぎりを三〇〇個作って、道なき道を持って行きました。でもその被災地で私たちの十三穀米の一部を作ってくれていたわけです。ですから「多分これを食べたいんだろうな」と思って、その十三穀米のおにぎりと、みそ汁を作りました。日本豊受自然農の味噌と無農薬野菜で作った六種類の乾燥野菜を入れて、お湯を注いだらその場で作れましたからね。その二つはすごく喜ばれました。これはただもう母心でやっているわけです。

―本当に、自分たちの血のつながった家族だけではなくて、誰もが自分の子どもだったり、家族のように思えることが大事ですね。

そうですね、そんなふうに考えています、逆に自分の子どもは放っておいてちょっと可哀想なところがあるかもしれません。だから我が子ともなるべく過ごせるように、今度休みをもらって、娘の帰国中はなるべく二人で楽しく過ごそうと思っています。上の男の子は海外で就職して、もう日本には帰って来ないつもりです。まあ、それはいいよ、と言っています。

これまでよく私みたいな子育てのへたくそなお母さんについてきてくれたな、と思うんですよ。この子たちが私をこれだけ成長させてくれたんです。うちの子どもたちは正直でしたよ。私に愛がないときは、本当にわめいて、「愛を出せ」、「愛を出せ」って言ってくれましたしね。私が手厳しいこと言っていると「それが嫌なんだ！」とすごく怒りました。「おまえたちに責め立てられて、お母さんもうここにいたくないから家出しようかな」と言ったこともありました。

私も子育てをして、自分の息子や娘から多くのことを教わり、とくに愛するということを教

わったおかげで、ここまでの人間になれました。大きくなれたんですね。ですから子どもを持って本当に良かったなと思っています。

―『毒と私』に、先生がチャーハンを娘さんのために作ったら、「私の嫌いなピーマンが入ってる！　お母さんは私がピーマン嫌いなことも知らないんでしょ！」というようなことを言われて投げ捨てられたというエピソードがありましたよね。私も親として共感するのか、切なくて、その部分を思い出してもまた泣いてしまうんです。

本当に私は忙しくて、娘の好きなもの、嫌いなものを知らなかったんですね。それは事実でしたね。「ピーマンが嫌いなんてことも知らなかったろう！」と言われてはっとしました。

私は仕事にかまけて、子育てから逃げてきたのです。だからフライパンごと、チャーハンごとひっくり返した娘を怒ることができず、「もう一回作りなおすから」と言ってピーマン抜きで作りました。幸い娘はおいしそうに食べてくれました。そのときもう夜の一二時近くになっていました。

それからは「自分が絶対正しい」という人間だった私が、どんなことを言われても娘を受け入れようと思い、「そうだね、そのとおりだね」と言って、彼女の言うことを聞くようになりました。そうしたら娘が私に信頼と愛を示すようになっていったのです。壊れた関係を修復するには「受け入れの行」をするしかありませんね。

また子どもがいない女性、男性でも、本当に愛ある人がいますね。ああいう方々は子どもで訓練されなくても、もともと愛があるから、子どもをもらわなかったりするんですよ。それはそれですばらしいと思います。

―本当ですね。私なんかまったくダメで、子どもを生む前は子育てに興味のないタイプでしたから、本当に子どもに成長させてもらっているなと思います。

私も、子どもに教えてもらったり、患者さんに教えてもらったり、生徒に教えてもらったり、また社員に教えてもらったりと、いろいろな方に教えてもらっています。だからいろんなところからの学びがいっぱいあっていいなと思っているんです。人生って面白いですね。

私が考える、生きるコツは、すべて受け止めるということでしょうか。生きていると本当にいろいろなことが起きますよね。でもいかなる嫌なことも、いかなる苦しみも、それはもうもらわなきゃいけないんです。ですから嫌がらないでどんどんもらっていきましょう。

悪いとき、いいときがあってもそれが人生です。起きたことは、あなたが乗り越えられるから起きたんです。それは神様からのお試しだと思うんです。そのとき失敗しても、また次にがんばればいいんです。

だからたとえば一生懸命勉強した子が、大学をすべったとしても、結果はどうでもいいんですよ。うちの子も大学に受かったのに自ら一年留年して、「あと一年お金かかる」ってチラッと言いましたけどね。でも「いいんだよ、おまえが受験勉強でヘロヘロになって、おまえの命と魂がボロボロになるくらいだったら、この一年休んでもお母さんは全然大丈夫だから、休みなさい！」と言ってあげました。いい親になりましたね。うふふふふ。

すべてが成功するわけじゃない。七転び八起きです。でも成功しなくていいんですよ。それを一生懸命やったかどうかが大事なんです。

人間は誰にでも分け隔てなく愛を発信できるようになるために、何度も生まれ変わるのです。悪いとかいいとか二元性にとらわれず、広い目でものごとが見られますようにと自分を訓練しています。私も発展途上です。

今日は橋本さんとお話しできて楽しかったです。ありがとうございました。

ーこちらこそ、すばらしいお話をありがとうございました。

Profile

Torako Yui

由井寅子

農民　ホメオパス

1953（昭和28）年、愛媛県生まれ。33歳のとき英国で潰瘍性大腸炎に倒れた際、ホメオパシーに出合い、わずか４粒のレメディーで劇的に改善、完治。これをきっかけにホメパシーを学ぶ。日本人として初めて英国ホメオパシー医学協会（HMA）の試験に合格しホメオパスとなる。英国でホメオパシークリニックを開業、その後帰国。1996年から日本でのホメオパシーの本格的な普及活動を始め、翌年にホメオパス養成校RAH設立。医原病、発達障害などの難病の症例がホメオパシーで改善し、海外の学会等でも発表され「Zen（禅）メソッド」として国際的にも注目されている。
また、農薬、化学肥料を一切使わず、土壌菌とホメオパシーのレメディーでの自然型農業を８年前から展開。農業生産法人日本豊受自然農代表として、洞爺と函南にて自然農を行う。
『毒と私』（幻冬舎）、『ホメオパシー的信仰』、『予防接種トンデモ論』（ホメオパシー出版）など著書・監訳書多数。ユーストリームTV番組「とらこ先生の人生相談」好評放映中。日本ホメオパシー医学協会（JPHMA）会長、カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー（CHhomシーエイチホム）学長。

※本文中で紹介されましたホメオパシーに関するお問い合わせは、カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー（CHhom：シーエイチホム）
URL：http://www.homoeopathy.ac/　　TEL：03-5779-8005
E-mail：CHhom@homoeopathy.ac　までお願いいたします。
また、アクティブプラントや寅子先生開発の自然派商品、食品などの購入を希望される方はCHhomショップ　http://shop.toyouke.com/chhom/
TEL：0557-86-3075　までお問い合わせください。

この度は私ども新日本文芸協会 SNB49 プロジェクトの出版物を手にとっていただき、心より感謝申し上げます。

SNB49 プロジェクトは「新日本文芸協会　みんなよくなるプロジェクト」の略です。これからの時代を楽しく、明るく、幸せに生きるために、皆さんのお役に立つと思った情報をご紹介しております。

ただしここでご紹介する内容はあくまで個人の経験に基づくもので、万人にとって正しいことを保証するものではありません。

すべての情報について、どう捉え、どう行動するかにつきましては、読者の皆さまご自身の責任においてご判断いただきますようお願い申し上げます。

新日本文芸協会 SNB49 プロジェクト代表　橋本留美

愛の時代へむけて　いまホメオパシーができること

2012 年 10 月 12 日　初版第一刷発行
著者　由井寅子
発行者　橋本留美
発行所　新日本文芸協会
〒303-0043
茨城県常総市内守谷町きぬの里 2-18-1
TEL 050-3735-9135　FAX 029-721-4155

＜資料提供・編集協力＞　カレッジ・オブ・ホリスティック・ホメオパシー（CHhom）　21 世紀幸塾
＜装丁・製本協力＞　大塚のり子
＜編集＞　橋本留美（新日本文芸協会 リュウメイズ企画）

©Torako Yui 2012 Printed in Japan
ISBN 978-4-906977-01-7
乱丁本・落丁本はお取り替えいたします。

※ この小冊子の販売にご協力くださる方を募集しています！
書店その他の商店、ネットショップ、イベント等で出店される方、個人の方など、まずはご連絡ください！

新日本文芸協会 リュウメイズ企画
http://www.sn-bungei-kyoukai.com/
TEL 050-3735-9135　FAX 029-721-4155
E-mail daihyo@liumeis.com